

會



報

1965年11月

245

日本山岳会

◆研究◆

なだれの分類

金坂 一郎

いままでに発表された、なだれの分類法は数少なくない。なだれの実態が科学的に明らかにされていないのであるから、研究者によって多種多様な分類が行われるのは、ある程度やむをえないことである。ことに系統だった分類の説明なしに、いきなりある名称が出てきたりすると、論者が何をい want としているのかつかめないし、また同じ名称であっても、論者によってその定義や内容に相違があり、議論がからまわりする場合が多い。

もちろん、分類の目的が異れば、幾種類の分類が併存しても差支えないし、それは研究が進んだということにもなるのである。たとえば、筆者はデブリの形によって、なだれを集中型と発散型に分けて観察することにして、これを観察して埋没している人の位置を推定するための分類である。こうしたいろいろの目的のため、数多くの分類が現れるのは結構であるが、一般的になだれについて論じる場合には、共通のひとつの分類法に従わねば、明確に考えを

伝達することができない。

こうした折、日本雪氷学会ではなだれの分類法とその名称を定めた。その細部については「雪氷」二六巻六号（昭三九、一一）に詳しいが、ここではその概略を紹介し、また本会の分類と比較対照しながら私見を述べて見たい。

まず定義は第一表のように行われるが、その区分名六個を順次つなぎあわせて、第二表のような六種類のなだれを定義することができる。

この中で、点発生、面発生という言葉には初対面の方もあるかと思うが、この区分はヨーロッパ

目次

研究・なだれの分類……………金坂 一郎…1~3	
・高い山—深田久弥論…深沢 忠孝…4	
・大雪山はタイカダイカ……………武田 久吉…7	
・欧州とスイスの最高峰……………(I. Y.)…5	
日本山岳会六十周年記念関係報告…13~14	
随想・二つの思い出……………中司 文夫…18	
・NTVの「アイガー北壁」……………角田 明…15	
・ローガン余話……………川上 隆…10	
海外情報・ガンガブルナ、マッターホルン北壁、イエールパハー (I. Y. 4~5)・アルパータ (田島守、6~7)・コー・イ・モンディ (矢野真、8)・グリーンランド (2) (宮原純、18)・フランス登山界の近況 (近藤等、11)・トレイの遭難 (小野尚俊、11)	
会員通信・海外へアンデス・スイス・シャモニー・国内へ二つの宿・梓会……………9, 12	
諸会・第3回海外登山会員懇談会……………14	
・国際環境生理学会……………15	
支部情報・東海◇静岡◇東京……………15	
図書紹介・海外登山雑誌紹介……………17	
会務報告・新入会員・住所変更……………19	
直通電話開通のお知らせ……………15	
(404) 7657	

第一表

なだれ分類の要素	区 分 名	定 義
なだれ発生の形	点 発 生	一点からくび状に動き出す。一般に小規模。
	面 発 生	かなり広い面積にわたりいっせいに動き出す。一般に大規模。
なだれ層の雪質	乾雪(かわきゆき)	なだれ層が水気を含まない。
	湿雪(しめりゆき)	なだれ層が水気を含む。
すべり面の位置	表 層	すべり面が積雪内部。
	全 層	すべり面が地面。

第二表

なだれ層の雪質

乾雪

湿雪

なだれ発生の形		
点 発 生	面 発 生	
点発生乾雪 表層なだれ	面発生乾雪 表層なだれ	面発生乾雪 全層なだれ
点発生湿雪 表層なだれ	面発生湿雪 表層なだれ	面発生湿雪 全層なだれ
表 層		全 層
すべり面の位置		

点発生なだれは、われわれが急峻なガリーの下降などで、足もとから小さな表層なだれが出る場合に、切断面なしに一ヶ所から未ひろがりにもくもくと滑りおちるやつである。冬山の積もりたての極めて軽い雪の場合に見られるし、また同じく乾雪(かわきゆき)でも、降雪後数日を経た雪にもこの点発生乾雪表層なだれが見られることがある。新雪の翌日、日射によって湿った雪面に、雪庇の鼻先がかけ落ちて来てこの種のなだれ

▼の学者の間では、普通に行われることである。もっとも、ヨーロッパでは面ではなく、線発生と呼んでいるが、面発生なだれはある一定の厚さの雪層がいっせいにすべり出し、明瞭な切断面を残すので、面発生と呼ぶ方が適切なりとして定められた。

が出るのが、点発生湿雪（しめりゆき）表層なだれであり、初夏のざらめ雪を下降するとき、勢いに乗って飛ばす足もとからこのなだれが出ることもある。

点発生なだれは、一般には大きなくならないうちに止まってしまふので、遭難の原因になることは少なく、登山事故はほとんど面発生なだれによるものよりである。しかし点発生なだれが刺激となつて、大きな面発生なだれを誘発する場合も想像される。上方から襲ってきたなだれについては、点発生か面発生か区別できない場合もあるが、発生地点を明らかにした場合は、登山事故はほとんど面発生なだれによるものである。なお、点発生は全層なだれはまだ発見されていない。

面発生湿雪表層なだれは、天気の良い暖かい冬の中級山岳や春山の新雪後の湿雪でよく見られるもので、歩行とか確保による刺激によって出る場合が多い。新雪の場合にも、ざらめ化した雪の場合にも見られる。面発生湿雪全層なだれは、いわゆる底なだれで、気温上昇とか雨によって出る自然発生なだれである。これらについては、登山者はだれでもよく気をつけるので、遭難例はあまり聞かない。

面発生乾雪表層なだれは、いわゆる冬山のなだれで、登山遭難のほとんどはこのなだれによるものである。

だ。降りたての軽い新雪から、よくしまった乾雪までを含む。面発生乾雪全層なだれは、全層の雪板なだれがこれにあたるが、そのほかにも、昭和三十三年十二月の早大山岳部の明神東稜の遭難のように、新雪直後の乾雪の全層なだれとか、北海道によく見られる乾燥旧雪の、自然発生の底なだれがある。筆者が草津の殺生河原近くで見たデブリは、この最後の例の同類と推定されたから、本州でも見られるかも知れない。

以上によって、雪氷学会による分類のやり方の大体を説明したわけであるが、この分類の特徴は、三つの観点、すなわち、点発生か面発生か、乾雪か湿雪か、表層なだれか全層なだれか、という区分によって、はっきり右と左に分けてしまうので、一見して大変明快のように考えられる。そのかわり、ひとつの枠の中のなだれ、たとえば登山者にとって最大の関心事たる面発生乾雪表層なだれを取りあげて見ると、この中には、積もったばかりの比重〇・一以下の軽い雪のなだれから、クランポンがほしいような堅雪による雪板なだれまで一括して含まれているので、実際問題としてはこの分類をなお細分する必要がある。しかし学会としては、なだれの研究は進歩の過程にあるとして、現在の段階としてはこれ以上の細分化は避けている。

なお、分類にあたって、以上の三つの区分が明らかにできない場合には、不明な要素を省略した名称を用いることになっている。たとえば、なだれ発生の形が不明な場合には、単に乾雪表層なだれと呼んだり、乾湿も判定しがたいときは、すべり面の位置だけをとり、表層なだれと呼ぶ以外に方法のない場合もある。

次に、なだれ発生の形やすべり面の位置は、発生状況を目撃すればたいいてい区分しうるものであるが、雪質の区分は簡単でない場合が多い。曇天または夜間で気温が引きつづき氷点下の場合には、まず乾雪としてまちがいないが、気温が氷点下でも、日射のあるときや、気温がわずかに氷点を上まわった曇天などでは、雪の水分を計測して見ない限り、乾湿の区分はできない。よく登山者は雪を手で握ってかたまるときは湿雪として、握るが、完全に乾いている雪でも、あまり気温が低くないときには、手で握ればかたまるのは当然である。また、積雪表面が湿雪であっても、なだれのすべり面が乾雪だという場合もありうるのである。

この分類は大変明快なようであるが、この点の区分があいまいになりやすいので、報告者としては雪の乾湿を、一目瞭然の場合以外には断定しない方がよいと思う。なだれのすべり面の位置を区別する問題は、一見単純のようである。

る。しかし、一歩つっこんで見ると、簡単には割りきれない場合がある。たとえば地表にしもざらめの層を生じ、乾雪全層なだれを生じたとする。このなだれ層は直接地面をこするわけではなく、しもざらめの層の上を滑走するのである。だから、地表ではなく、雪層中のしもざらめ層、たとえば氷板上のしもざらめ層が崩れて出る表層なだれとは実質上の差異がないわけだ。また湿雪全層なだれの中には、雪層と地表との境がすべり面となるもの、泥のようになった地面の中にすべり面ができる土砂崩れ形式のもの、前記のように地表に接した雪の中にすべり面が生じるものなど、各種のものがあるといわれる。従来の見方から簡単に、全層なだれと呼ばれるものでも、すべり面の状態は詳細に観察して報告する必要がある。

この分類は日本のなだれだけを対象としているので、氷河なだれを含んでいないが、そのほかにも、この分類の枠からはみ出しそうなのだが、この日本でも見られる。たとえば、普通の底なだれ（面発生湿雪全層なだれ）がほとんど終った晩春の頃よく見られるものであるが、急な雪渓が底面の方から溶けてきてアーチ型の空洞を作り、これが自重に耐えかねて、いっせいに縦横に割れて雪塊となり、斜面を崩落するなだれである。このなだれは面発生という定

義の中におさめることはできる。しかし面発生なだれのほとんどは、斜面にたった一本だけの、直線または折線に近い形の線に沿って、発生面ができるもので、このなだれのように、縦横に多くの線によって割れる場合とは、区別した方がよさそうに考えられる。雪氷学会としては、このなだれも一応面発生湿雪全層なだれと呼ぶことにしている。学者の立場としてはあくまでも慎重に事を運ばなければならぬのは当然であるが、あえて素人の筆者をしていわしむれば、点発生なだれを面発生なだれと区分した以上は、このなだれも一般の面発生なだれとは区別した方がよいと思う。事の順序としては、面発生の次から体発生とも呼ぼうか。つまり体発生湿雪全層なだれという種類を設けるのである。

体発生乾雪全層なだれというものを、筆者はまだ目撃したことはない。しかし晩秋の氷化したアーチ型の極めて不安定な雪渓を見た歩いたりするときは、体発生の乾雪（実際は氷）なだれを生じることがありそうに思われる。

次は本会において採用している分類との比較である。本会では過去において、山日記のなだれ関係の記事の不統一を整理する目的で、小委員会を設けてなだれの分類を定めた。それは、乾燥なだれ、雪板なだれ、湿潤なだれ、旧雪な

だれの四種類である。長たらしい呼び名は避けて、簡潔に行こうというところで、こうした名称が使われたが、いまにして思えば、雪質の名称を詳しく冠して、次のように呼んだ方が誤解が少ないのではないかと考えられる。

乾燥新雪なだれ
乾燥旧雪なだれ
湿潤新雪なだれ
湿潤旧雪なだれ

本稿においては、この名称に従って議論を進めて行きたい。各種なだれの特徴については、第三表に示す通りである。

この分類は単に雪質の説明に過ぎないように見られるが、実は、雪質がちがえば発生原因にも大きな差があるという前提に立っての呼び名である。(第三表参照)。これを雪氷学会の分類(以下雪氷案と呼ぶ)と比較してみると、本会案は、典型的な四種類のなだれだけを定義して、この中間に無数の種類があるはずだといった行き方である。雪質の変化は必ずしも乾雪が突然に湿雪になるとか、新雪が一瞬に旧雪に変わるといったことではなく、無数の段階があるはずだ、という観点に立っている。われわれは新雪と旧雪の差異を明確に定義づけてはいないが、典型的な乾燥新雪と乾燥旧雪のちがいはだれにでも明瞭に区別できる。雪の乾湿についても同様である。だからなだれの種類について

第三表

名 称	主 要 発 生 原 因	発 生 の 発 見 的 特 徴	不安定が持続する条件	安定化する条件
乾燥新雪なだれ	積雪量の増加	増雪の刺激 歩行の刺激	寒 冷	温暖の持続の後 風による吹きかため
乾燥旧雪なだれ	不安定な堆積 霜ざらめの生成	歩行の刺激 まれに自然発生	寒 冷	温暖や雨の後
湿潤新雪なだれ	積雪強度の低下	日射・温暖・雨 歩行の刺激	温 暖	寒 冷
湿潤旧雪なだれ	積雪密度の増加 積雪強度の低下	日射・温暖・雨	温 暖	寒 冷

も、四種類の典型の中間の型(第一図参照)や複合の型が無数にあるとしているのである。これに反して雪氷案では、二者択一式の操作を三回行って、すべてのなだれを六種類(もし休発生という型を認めれば八種類)の枠の中に仕訳してしまうのである。この雪氷案を第一次の分類とした場合、本会案がどういう関係にあるか考えて見よう。

まず、点発生乾雪表層なだれには、乾燥新雪のものも乾燥旧雪のものもあるということはすでに述べた。点発生湿雪表層なだれにつ



いても同様になる。雪から湿潤旧雪まである。

そこで点発生表層なだれの中には、本会案の四種類が一応そろったことになる。しかしすべての種類のなだれがこれに含まれるのではなく、点発生という条件がつくのである。

面発生表層なだれについても同じことだ。面発生表層という条件がつけば、本会案の四種類のなだれは皆この枠の中におさまる。またこのことは面発生全層なだれについてもあてはまることである。全層なだれといえは湿潤旧雪によるものがすぐ思い浮かべられるが、その他の雪質の全層なだれも数多くはないが、明らかに発生している。だからこの枠の中にも本会案の四種類がおさまる。

以上の解説を第二表の枠組みを利用して図示したものが第二図である。乾湿の仕切りだけを取りはずし、□の中に本会案の略称を入れたものである。

これと逆の関係、すなわち、第一次分類に本会案を採用し、第二次分類に雪氷案をとるとすれば、第三図のような表現になる。本会案の乾燥新雪なだれから乾燥旧雪なだれに至る間に、雪氷案の乾雪

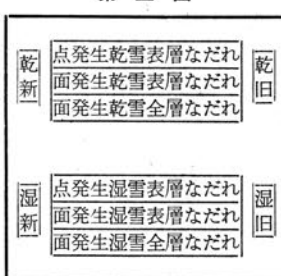
なだれ三種がおさまる。湿雪なだれ三種のおさまる方も、同様である。そもその出発点が異なるのであるから、両者の関係はこのように複雑なものとなるのである。登山者がなだれを分類するとすれば、まず遭難予防の観点に立つ

第二図

		なだれ発生の形					
		点発生		面発生			
なだれ層の雪質	乾雪	乾新	乾旧	乾新	乾旧	乾新	乾旧
	湿雪	湿新	湿旧	湿新	湿旧	湿新	湿旧
	表層		全層				
	すべり面の位置						

であろう。そのためには、なだれを発生原因のつかみやすい分類にすべきだ。本会案もこの観点によって考案されたものである。しかし雪氷案はなだれ発生時の状況を主体とした分類である。だからこれを登山者がにわかに全面的に採用することはできない。当分の間は本会案を用いるか、あるいはこれを改良して行く方が、てっとりばやいのである。しかし雪氷案といえども、これがすべてではあるまい。いずれは研究の進行とともに、この分類も細分化して行くべき、一層詳しいものになって行くであろう。その場合にも、なだれの発生原因といった重点的な問題はとくによく解明され、そういっ

第三図



た点を考慮に入れた分類ができることを期待したい。そのためにはわれわれも、なだれを本会案によって考えると同時に、雪氷案をも併用してなだれを観察して、そのデータを提供すること心がけなければならない。これは学問の進歩に寄与して、その成果を利用して貰うという、共存共栄の立場である。われわれは、先輩や仲間の尊い犠牲を土台にすることによって、少しずつなだれ対策の知識を積みかさねて来ることができた。その結果われわれの——少なくとも筆者自身の——得た教訓は、物理学的な結論というよりも、むしろ心理学的なものであって、いいかえればリーダーシ

ップの練磨によってなだれ事故は防げるということであった。これは逆にいえば、なだれの学問があるまり進んでいかなかったということなのだが、その故にこそわれわれ登山者は、なだれについての経験や知識を、探究者のために提供し、科学的な遭難予防の方法を確立して行きたいのである。(完)

▲高い山▼

— 高田久彌論 —
ノート

★ 深沢忠孝

当会理事深田久弥氏の仕事で、文学界・山岳界においていかに高く評価されているかは改めていうまでもないことである。例えば「日本百名山」が昨年の最高の収穫として、林房雄氏の文藝時評をはじめ、読売文学賞の受賞という称讃を思えば明瞭です。また現在刊行中の「ヒマラヤの高峯」が、貴重で優れた仕事であることは完成を前にして明らかです。作家、あるいは登山家として氏を規定しても無意味ですが、その仕事は充分検討されてよいと思います。今、論じ尽くすことが、数年後、ある機会からノートを作って来て、ほぼ見通しがつきましたので序々に論究したいと考えていますので、ここに覚え書き様のものを書いておきたいと思っています。

◇ 出来、文学辞典等では氏について、「純情、野性味、青春等を盛った作品を得意としている。また登山家として山に関する著作も多い。」(新潮社版)としているけれども、前記「日本百名山」が文学賞を受けたことだけを考えても、安易に作家と登山家に分離して考えることは、古典的すぎると思われます。随筆や紀行が文学でないというのはなく、優れた文学になり得た例は少なくありません。

しかし氏の場合、仮に「深田久弥論」と名付けるなら、両者が調和統一された高い次元で論じられるべきが適当だと思ふのです。

深田氏と私の出会いは、高校時代その編著「峠」に接した時に始まりますが、それはどちらかといえば郷里の峠

が出ていた興味からでした。本格的に愛読したのは、かつて中学校の教壇に立っていた時、氏の作品を扱った時からです。その作品は「開聞岳」でしたが、私の指導ノートには貧しいが感銘深かったメモが印されています。語句だっけ決して易しいとは言えないその文章に、中学生が実に熱心について来たのです。奇警奇語をてらった文章などでないことは、これまでの氏の作品活動から当然としても、かなりなおおらかな作品に東京の真中の現代っ子が惹かれたことは、私の驚きであり感動でした。

橋本漢の「名山論」にはじまり、歴史、民俗、紀行、感想などからなるその文章で、彼等を惹きつけたものは何であつたのでしょうか。わずかの準備しかしてなかった私は、急いで作品研究や氏の他の作品を調べて授業に備える仕末でした。それがそのノートの元になったのですが、その後高校に移って山の会の指導にあつたというが、彼等はガイドブックは仕方なしに読んで、古典と言われる著作なども勧められてもなかなか読まれません。あの中学生たちのように、じっくり読む喜びを与えてやりたいとは思いますが、半大人の彼等には思うようにはいかないようです。

◇ とまれ、氏には今後今まで以上に優れた作品を出されるように願っています。現段階では「日本百名山」が最も手近な大切な作品であることに異論はないと思います。後記で氏は「私の山登りは少年時代に始まって今日に至るまで殆んど絶えたことはいないから、多くの山を知っている点では自信がある。さらに「私に自信を持たせてくれたのは五十年近い私の登山歴である」と言われます。これは名山を選ぶについて言われたのですが、氏自ら登山の満ちた言いながら、この言葉は「ずいぶんした重みを持っています。



この自信、巾の広さを明晰にし、意味付けするのが氏についての登山家論でしようが、それと作家との接点、その上の段階で調和統一しているものがさらに重要と思われる。氏に最近純粋の小説が少なくなったことを考える時、「日本百名山」は作家と登山家の接点での仕事であると考えてもいいと思います。

氏が「私の欲しいものはリゾリズム(厳格主義) (朝日・一冊の本)」と言ふ時、そこに中心の背骨をみる思いがしますが、この言葉一つにしても、作品、登山歴を通して具体的に位置付けされねばなりません。少年時代から登山を始めた氏には、作家より、登山が先であつたのですが、いわゆる世に出られたのは作家としてであります。

即ち東大時代の第七次「新思潮」後、新感覚派の一人として活躍され、その間も登られていて、昭和九年に「わが山々」を出されたわけですから、いわば氏の内部には、出発から常に両者が同時的に存在していたといつてもいいでしょう。

何故山へ登るかという愚問は、もちろん氏に発してはなりません。それは何故小説を書くかという問も同じです。しかし氏が残された足跡と方法と意味は、厳然と光茫さえ放つて存在するわけですから、それらを明らかにするに作品研究を基礎としますが、氏自身の言葉によれば初期の作品はジイドの「法王庁の抜け穴」に学んだといいますが、まず比較文学的操作が是非必要です。原典の分析は私の貧しい仏語ではとどろく、結局翻訳によります。(氏も初めは翻訳といひます)

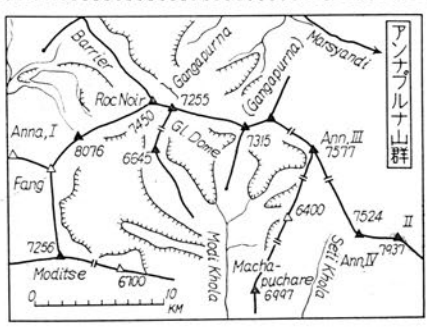
いづれにせよ氏は私にとって険しく高い山であります。極地法よろしくきわめたいと思つています。

海外情報(三)

— “Die Alpen”, August, 1965 —
ドイツ隊のガンガプナ Himalaya : Gangapurna

Gunter Hasner に率いられた「一九六五年・ドイツ・ヒマラヤ遠征隊」は、三人のシェルパを伴い、五月の六日と八日に、ガンガプナの頂上に立った。因みに彼等はこの高度を 7,450 m としているが、これは略図の Roc Noir のことらしい。すると従来の地図にある 7,315 m の峰 (Gangapurna) は「無名峰になる。」

この峰は Roc Noir (黒岩) と



アンナプルナ山群

女性によるマッターホルン
(Bergsteiger, 65/Aug.)

北壁の初登

ミューンヒェンに帰着したドイツ隊全員、隊長は右から二番目

ウインバーのマッターホルン初登百年記念行事が行われている時に、注・マッターホルンは、フランス語ではセルバン、イタリア語ではチゼルビノという。ジュネーヴの住人ボシェ夫妻(Michel and Yvette Vaucher)の二人がツェルマットのガイド Ohmar Kronis を伴い、北壁を登登した。彼等は七月十三日午前三時半出発(場所不明、午後九時、頂上から五〇mばかり下のところに達してビバーク翌十四日午前七時同所頂上に無事登った。(この日は二度ウインバー等が百年前に初登頂をした日である。)

北壁はこの日、深雪に被われていて非常に条件はよくなかったが、イヴェット夫人が女性としての初完登者となったことは祝福されてよい。



★欧州の最高峰と

★スイスの最高峰★

主題の件について久留米大学の脇坂順一氏(会員)から地図(五万のツェルマット図幅)及びモンテ・ローザの写真(デューフル・シュビツェが顕著に見えるもの)を送られ、スイス国内の最高峰はドームであることを明示されてきた。(付図参照)

これについて私はなお、念のために

W.A.B. Coolidge の The Alps in Nature and History, London, 1908

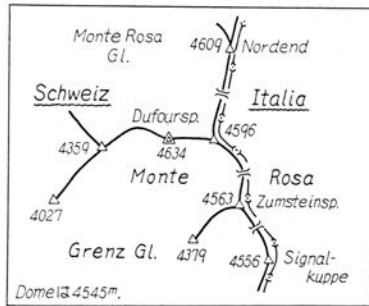
を調べてみたが、それには次のような記述が見られた。

(314~315 pp.)

疑問なのは、スイスの最高峰の山は Dom (4,545 m) かという点である。さて若し、山というものが、他から多少離れた独立した峰をもっているものという意味にとれば、その主張は正しいことになる。

然し、若し(この方が一般的だが)山が特定の頂上という意味ならば、前記の主張は半分正しくはならない。何となれば、Monte Rosa Dufourspitze (4,634 m) は、全くスイスの国内にあり、分水脈で且政治的な国境線を形成している主脈から西方に突き出している支脈の上に位置しているからである。

次は欧州の最高峰の問題だが、これ



残るのは Elbrus が欧州にあるのか、アジアにあるのか、という問題である。英語系の地理学者の間では一般に、コーカサスはアジアと欧州の間の自然的境界であるとしているから分水嶺の北側にある Elbrus は欧州の山ということになる。これは Freshfield の意見(1868)でもあり、私がタイムズ紙上で、攻撃された時に、英国地理学会によって支持された見解でもあった。そして現

か、アジアにあるのか、という問題である。英語系の地理学者の間では一般に、コーカサスはアジアと欧州の間の自然的境界であるとしているから分水嶺の北側にある Elbrus は欧州の山ということになる。これは Freshfield の意見(1868)でもあり、私がタイムズ紙上で、攻撃された時に、英国地理学会によって支持された見解でもあった。そして現



在では一般に Elbrus が欧州の最高峰と認められている。ロシアの登山家達はこの点について非常にやきもきしていたが、私の結論がこうなつたので、多分喜ぶことであらう。

以上は Dunsheath の書からの引用であるが、尚地図を見るとコーカサス山脈は国境線からわけても全然アジアに属する。尤も人種、宗教などの点からいって、コーカサス山脈の南側は相当アジア色が強いようである。それにしても、エルブルズは、デューフル・シュビツェではないが、主脈の北側に出た支脈の上にあるのだから、この点からいっても、欧州(ソ連の場合は大体ウラル山脈以西)の最高峰はエルブルズといつても差支えない。(吉沢)

三、イエールバーハの南峰

Stügel des Yerpai

ベルンのアンデス遠征隊(一九六五年)は、六月十七日にワイワッシュの Nevado Raac (6,048 m) 初登に非ず。六月二十二日にイエールバーハ南峰(6,538 m)の初登頂を行った。ラサクに登ったのは Ernst Schmeid, Theo Marti, Christoph Feitknecht の三人。彼等はかなりの悪天候を冒して C II (5,400 m) から登ったのである。

天候の好転により Theo Marti と Erhard Wniger の二人が先登隊として BC (4,100 m) 発、イエール峰に向った。シュミットとファイトクネヒトは、尚一日 BC に残り、あとから前進ビーク地点に向うことになる。先登隊は深い新雪を冒して二十一日午前二時半 C II を後にし、五時四十五分頃、シュレルドの中にある C III (6,100 m) に達した。

高所ツェルトは二mの雪に埋まっていたので、屋根が見えるまで掘るのに一時間もかかる。食糧、ツェルトザック二個、補充綱八〇mとマット一個はあったが、コッヒェルは残念ながら遂に見え出来なかった。

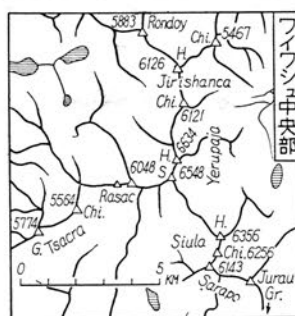
午前七時、オーバー・ハングになっていくシュレルドの上部を攀じ登る。これからは新しい足場を刻む。屋頂二度目の悪場にぶつかった。エールハルトの両足が凍ったが、長くマッサージュをして循環を戻す。七〇mのザイルで急壁を越え山稜を攀じるとは骨が折れた。深い新雪に覆われた剣のような山稜を辿るのは大変だった。

最後の陽光がまだ山稜を照らしていた。もう直ぐ暗くなる。エールハルトは運が悪かった。左足のアイゼン

紐が弛んだので締めようとした時、手袋を片方、落してしまった。手頭温め(Pulswärmer)でこれに代用する。

山稜上六四五〇mの地点で、遂にビーク場所を発見する。マットを敷いたビークザックが二つ、新雪の中におかれる。人数は倍になるし、コッヒェルはなしで、温かい飲みものは呑めず居心地の悪いところで、時々睡むだけ。水のような山稜上の風のもので、時間の経過はまるで永遠のように感じられた。

朝六時、明るくなった。然し日の出を待つ。八時過ぎると直ぐ、Sch. と Feit が起き上り、前者は足に凍傷をうけていたがそのまま出発した。あとは朝食の後、凍った靴とアイゼンをつけて仲間のを追った。



先登隊のあとから後発組も遂に未踏のイエールバーハ南峰の頂に立つ。主峰との高度差は僅かに八六mであったが、縦走などは問題外であった。両峰の間には厚く雪に横たわり、雪庇の張り出した登山道が横たわっている。人間の方のコンディションはよかったが、これでは手の下し方がない。

頂上で小憩の後、一日で BC に下り七月の中旬には、全員無事故故国に戻った。(IY)

◇長野高校 OB 山岳会◇

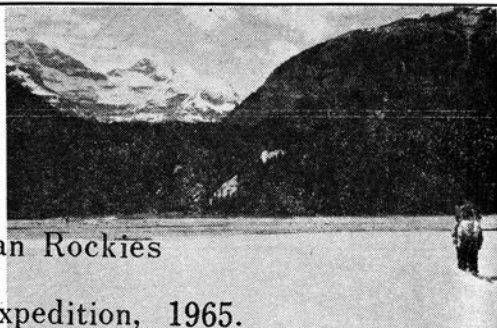
田 島 守

本稿は特に JAC と関係の深いアルバートの第五登山であるので掲載した。
(編者)



Canadian Rockies

Expedition, 1965.



海路と空路に分かれて日本を出発した五名は、六月二十六日ヴァンクーバーに到着した。ここからは列車の町カナディアン・ロッキーズの山中の町バンフへ行き、さらにバンフからは車をチャーターし、根拠地「オナスクリーク」のキャンプ地に落ち着いた。ここでレインジャーのウインクラー氏に会い、示唆いたく共に入山許可書をいただき準備は完了した。

七月三日いよいよ入山である。サンワブタ川を渡渉して、対岸のウーレー

岳界諸先輩の御教示を得て実現した私達の遠征は、カナディアン・ロッキーズのアルバート・無名峰・ウーレーの諸峰を目標にした。会としてははじめての海外遠征であった。

沢の末端にベースキャンプを設営した。サンワブタ川は川幅五百メートルにも及ぶ大きな川だが、流れは幾すじかに分れており、渡渉はさして困難ではなかったが、氷河から流れて来る乳色の水は氷のように冷たく、足の感覚はたちまちなくなってしまう。

ここからウーレー沢をさか上り、無名峰の下に C1 を設置する計画である。四日から私達は直ちに荷上げを開始した。このルートは昨年の川口隊と同じで、ところどころに赤布があったが、原始林のバイントリー(樺)の中の荷上げはつらかった。C1 はウーレー沢の上流、モレーンに囲まれた最後の森林帯で、目前には無名峰の主峰(二峰)が迫り、北には黒々としたウーレーが聳えているすばらしいところである。四日間で荷上げは完了した。

私達は、まず C1 から無名峰とウーレーの登攀を試みることにした。地図でも、望遠鏡での偵察でもそれが可能であろうと考えられたからである。

七月九日無名峰を目指して出発したが、悪天のため取りついたら午後引き返した。午後晴れ間を利用してウーレー乗越しに偵察に出た。ウーレーから無名峰に続く稜の最低鞍部の乗越しに出、はじめてアルバータの姿を眺め、深い感動と、巨大な岩壁に圧倒された。

七月十日五名は無名峰目指し四時三十分出発。1 峰より東に伸びている稜にとりつき、浮石の多い稜を忠実に

登り、大きな雪の斜面を直登し、主峰に出た。午後二時積木を重ねたような主峰の登攀を続け、無名峰 1 峰の頂上の岩壁の下に出た。しかし、雷鳴を伴った吹雪に見舞われ、僅か三十 m の岩壁を残し退いた。下はみぞれで、くたたくに疲れ、ようやく午後七時 C1 にたどり着いた。翌十一日みぞれで停滞。その中をアメリカハバード大山岳部一行五名がノース・トゥインを目指して来、私達の隣に幕営した。

七月十二日相変らずのガス模様の天候の中を田島・渡辺・下平の三名はウーレー峰目指し C1 出発。頂より南西にのびる岩壁よりの登攀を試みた。ウーレーの肩から、頂へ続く岩壁のルンゼを登り、あと七、八十 m に迫ったが、吹雪と時間不足で引き返した。

C1 からの登攀には時間的にも無理が多く、私達の予想は広大なカナディアン・ロッキーズに完全に C2 がえされた。私はウーレー乗越しに C2 を出すことを決意した。ウーレー乗越しへの荷上げは、非常につらく、不安定な岩場の登攀は身心の疲労を極度に

た。しかし、十四日 C2 が立派に設営された。

七月十五日午前五時 C2 を出発した。原、渡辺は、氷河をトラバースし、主稜を忠実に登り、八時二十五分ウーレーの頂に立った。私達の最初の登頂であった。

翌十六日久しぶりの好天に恵まれ、田島・中村・下平は無名峰登攀のため、主峰西面直下に C3 を出して入った。十七日雲々ない好天の夜明けと共に C3 を田島等三名は出発した。スタットフィールドと無名峰の鞍部より押し出しているブルーアイスの氷河を慎重に登り、無名主峰よりのびている雪の尾根のクラストに達した。しかし頂上には既にケルンがあり、私達が初登ではなかった。

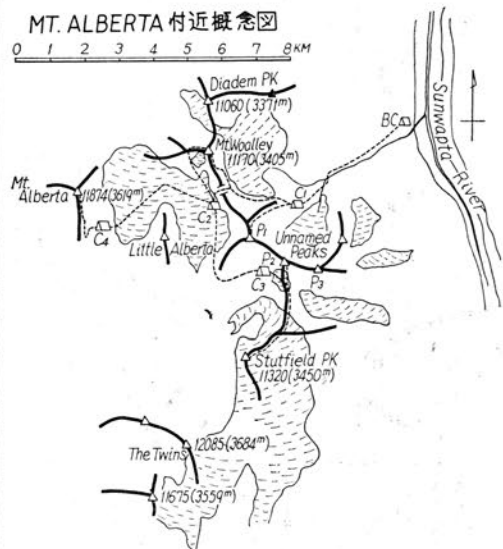
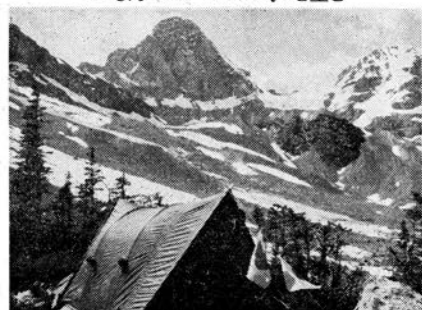
すばらしい頂上の展望をカメラにおさめた後、再び鞍部に引き返し、さらにゆるやかな雪の斜面を登りスタットフィールドの頂上に向った。新雪の下にはクレバスが多く神経を使った登攀の後、午後一時五分、雪原のピーク、スタットフィールドの頂上に立った。下りは始める頃に雷鳴を伴った雪に見舞われた。

翌十八日 C3 を撤収し、C2 に入り、そのまま休養と、アルバータ登攀準備のためベースキャンプへ下った。幸いベースキャンプでは悪天続きで充分休養がとれた。

七月二十三日最大の目標であるアルバータ目指し C2 へ入った。二十四日小アルバータの北を廻り、氷河を下り、アルバータ東面の直下モレーンの上に C4 を設営した。

二十五日田島・渡辺はル

C1 より Mt. Woolley を望む



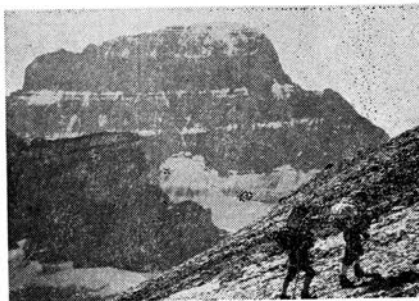
十七日 C3 を撤収し、C2 に入り、そのまま休養と、アルバータ登攀準備のためベースキャンプへ下った。幸いベースキャンプでは悪天続きで充分休養がとれた。

七月二十三日最大の目標であるアルバータ目指し C2 へ入った。二十四日小アルバータの北を廻り、氷河を下り、アルバータ東面の直下モレーンの上に C4 を設営した。

二十五日田島・渡辺はル



C3 付近より Alberta を望む



タを選び登り続け、主稜がすぐ目の前に見える地点で再びルンゼをトラバースし、主稜に続く北側の稜を登り、午後一時三十分ナイフリッジの主稜に立った。主稜は全くやせた稜で不安定な岩が積み重なっており、目のくらむような高度感であった。ここからは稜沿いに北へ進み、頂上近くの二十mと五十mのギャップはザイルを固定し渡り切った。午後三時四十分、私達は頂上に立った。頂の手前にケルンが積んであり、アメリカ隊が残したのである。

うピッケルの一部と、記録の入った缶が置いてあった。私達の登頂は五回目、八年振りの登頂であった。ガスの晴れ間を見て写真をとりにかった。午後九時三十分、ツェル地点のすぐ上までアップザイルの連続で下降したが、暗くなったため大事をとり、再びピバークした。三十日好天に恵まれ、ゆったりした気持ちで、慎重に下降を続け、十二時四十分、二名が待つC4へ帰った。

三十日午後ゆっくり休息し、三十一日はC4を撤収し、アルバータに別れを告げ、八月三日ベリスキャンプを撤収し、再びジョナスクリークのキャンプ地に落ち着いた。(完)

「略図説明」

- ★①雪渓、落石多く危険。
- ②下段の上、中段の下浮石多し。
- ③中段の上、岩に古い捨て縄あり。
- ④二十八日のピバーク地点。
- ⑤急な雪渓、非常に悪い。
- ⑥雪のついたルンゼの北の稜、ハーケン利かず、極めて困難な箇所。
- ⑦ルンゼをトラバースし、南の稜に出る。この辺で古いピトンを発見する。
- ⑧⑨北の稜へ再びトラバースする。
- ⑩帰途二十九日のピバーク地点。



大雪山は タイセツザン？ タイセツザン？

武田 久吉

この山名の読み方については、私ばかりでなく、すでにいろいろの人が疑問を抱いていたようであるが、現地について尋ねて見ても、定説がなく、何れでも通じるといふのが結論のようにうかがわれた。又この山に名を得た昆虫には、ダイセツタカネヒカゲがあるかと思えば、ダイセツヒゴタイという草と、タイセツワタスゲという草があって、命名者は銘々勝手という有様である。

昨年の夏大雪山の調査を終って、その見聞録を書くにあたり、山名の起りを知り度いと思い、最も信頼するに足りると思われる参考書として、大雪山調査会発行の、「大雪山」(大正十五年七月廿五日発行、著者は元旭川中学校教諭の小泉秀雄)を披見したところ、その一三頁に「明治廿六年博文館発行、松原岩五郎著、日本名勝地誌、第九篇、北海道之部、

一〇八頁に、大雪山、元名ヌタカムウシベとするに起因するものである」とあるに由り、「大雪山の名が与えられたのは、明治二十六年に東京の博文館から刊行された、松永岩五郎氏の著『日本名勝地誌』第九篇北海道之部一〇八頁に大雪山元名ヌタカムウシベとあるのが最初である」という。これをタイセツザンと読むのか、一定しないよう、ローマ字に綴る時には、いつも問題がおこる」と記したところ、同じ調査に同行された、北海道学芸大学旭川分校教授の稲垣貫一博士は、「地元識者はタイセツと濁らない」と私の原稿に註記されたので、私自身としては清音で読む方に賛成なので、大いに意を強くした。

ところで、頃日『山岳』第十二年第二、三号に載った、小泉秀雄氏執筆の「北海道中央高地の地学的研究」を繰いて、「明治三十六年八月発行、松原岩五郎著、日本名勝地誌第九篇北海道之部一〇八頁に既に大雪山と明記せるあり」とある(大正七年八月発行)を見て、年代に十年の狂いのあるのに疑問を生じたので、これを確定せんが為に、国会図書館参考書誌部を煩すこととした。日ならずして親切な返信が届いた、それによると、「おたすねの松原岩五郎 日本名勝地誌、第九篇 北海道之部(東京博文館)は明治三十二年九月

に刊行されて居り、同書一〇八頁の大雪山に関する記載は「『山嶽』中其高峻なるものを挙げれば大雪山(元名ヌタカムウシベ)なり」となっています。

「なお、日本名勝地誌は明治二十六年一月(第一篇幾内篇)から刊行がはじまっていることを、申しそえておきます」とある。これによると、小泉氏の記事は両方とも正確ではなく、又大雪山はタイセツザンでダイセツは原著者の意志を尊重したものでないことが判る。(完)

静岡県松原郡青年指導者の為の山岳講座

昭和四〇年七月十日〜十一日

静岡県松原郡本川根町教育委員会よりの依頼が静岡県支部宛にあり、本部より、講師として、辰沼広吉氏、竹田寛次氏の派遣を願ひ左の如く実施。地方の各種方面の指導者に、直接、東京会員が接する事は種々の意味で、有意義であり今後と足るを伸ばして頂きたい。

主催、静岡県松原郡教育委員会、募集範囲、郡内の各町村の教育委員会に於て青年指導関係者、約三十五名参加。於て文温泉ヒュッテ。第一日講座並びにヒマラヤスライド、質疑応答、第二日、実技として沢口山(一、四二四米)登山、尚、支部より山本朋三郎、鈴木璋一がオブザーバーとして出席。

年次晩餐会お知らせ

十二月三日(金)午後六時
日比谷三井ビル八階ホール
会費、一〇〇〇円



◆会員通信◆

(A)

① ペルー・アンデス便り

早大ペルー・アンデス遠征隊事務局長

高三 公一

拝啓、涼爽の秋益々御清祥の段お慶び申上げます。先般当大学ペルー・アンデス遠征隊のアンデスにおける登山活動の状況については略々お伝え申し上げましたが、その後現地よりの連絡によりますと、一行は新たにワイワシ山群のイェルバパハール峰(六六三三m)登攀を目標に、七月二十六日BC設営後、逐次高所Cを設けながら頂上を目指し、最後の力を傾注したのでありますが、八月十三日、高度六〇〇〇m付近で悪天候並びに疲労のため、残念ながら登山頂上を断念せざるを得なくなりました。

結局登山頂上には失敗いたしました、BC建設以来二十日間に亘る行動を無事終わり、既に根拠地オヨンに到着し、全員大変元気であることを伝えてまいりました。

その後ペルー、ボリビア及びアルゼンチン各国の遺跡見学等、約一カ月に亘る旅行を計画しておりますが、帰国は十月中旬カイヤオ出航、十一月中旬横浜到着の船便を予定しております。何よりも今回の遠征隊の登山活動を通

じて、無事重要な体験を重ね得ましたことは、皆様のご支援、ご援助の賜ものと、改めて感謝しておる次第でございます。

以上取敢えず御礼等々ご報告まで。

昭和四十年九月二十一日 敬具

(吉沢宛)

② スイスの旅

名須川 浩

仕事でアメリカからヨーロッパを廻ったあと、六月二十三日から二週間の休暇をとって単身スイスの旅をして来ました。ツェルマット周辺を歩いてから、帰りにモン・ブランとユングフラウを見てきました。

ツェルマットではまずゴルネルグラートからストックホルン(三三三三m)に登りました。快晴で、モンテ・ロザに始まって、ブライトホルン、マッタルホルン、ダン・ブランシュ、オーベルガルベルホルン、チナールロートホルン、ヴァイスホルン、遠くにオーパーラントの山々、ドーム、テッシェホルン、アルプフーベル、リムフィッシュホルン、シュトラールホルンなどの四〇〇〇m以上の氷河の山々に取囲まれて三六〇度展開する眺望に歓声のあけ通りました。

次の日はザンネガからシュテリゼーの湖水へ、その次の日はテオドル湖水を歩きました。

マッターホルンヒュッテに行く道は除雪や補修作業中でした。ヒュッテに二泊して、ガイド(ランダ村のゾンメルマッテル・レオ、六十才、マッターホルン登山二六六回)に連れられて三八〇〇m位まで登りました。岩壁の途中で夜があけてきて、モンテ・ローザが輝き出したとき、ツェルマットへ来て以来の感激は、実にその極に達した思いでした。

ツェルマットのガイド、ベルナル・ビンネル氏はこの四月に急逝し、実妹が駅前のホテルをやっていた。日本山岳会員だとうと、喜んで招じ入れられ、故人と山行を共にした日本人の記録を見せてくれました。古いところでは一九二五年に松方さん(現会長)がツムット尾根・マッターホルン・イタリー尾根の山旅をされたときの手紙がありました。

モン・ブランもユングフラウも快晴に恵まれました。壮大で華麗な眺めを窓にすることができましたがこちらの方はゆっくり歩くひまはありませんでした。

グリーンデルワルドではエミールシュトイリー氏は七十七才とかで健在です。ピッケルのベントの工場は日本人の注文がときどきあるといっていました。

スイスの山を歩いてみると、話に聞いている通り、道に空缶や紙屑がないのが、山の美しさと共に、実に清らかな感じがします。ヨーロッパでは街も公園も美しく保たれています。公共の場所をよこさない道徳が行き渡っているのが初めて山に来た人でも山をよこさないのであらうと思いました。日本の山も早くそうなりたいたいと思った次第です。

未筆乍ら、この旅行をするに当たって、藤島敏男氏をはじめ、足立源一郎画伯、青木昇氏、山田圭一氏等の方々からその体験談を伺い、資料を提示して頂いたことに厚くお礼申し上げます。なお山田氏は小生のあと、七月に、またスイス旅行をされ、マッターホルンに登山されたそうです。

③ シャモニーの登山学校を訪う

日 高信六郎

九月下旬、ジュネーヴでの用事が終

った翌日、久振りにシャモニーを訪ねた。あわただしい旅だったが、フランス登山学校に挨拶しようとして、宿からジャン・フランコ校長宅に電話したところ、生憎不在だった。夫人に出てもらって、例年日本山岳会を招いてくれる御礼と、今夏君島君の遭難によって折角の招待を無しに、ご迷惑をおかけたとお詫びと、手厚いお世話に対するお礼を述べ、特に旧知のフレンド、レビエフ・アール氏の御配慮に対する謝意の伝達方を依頼し、会員近藤等氏御夫妻の近況などを報じておいた。

翌朝出発の際学校を訪ねたが、校長は登校前で、職員も講習生も居合せなかった。この日(十一月十五日)から新コースが開かれる(由)受付の娘さんに名刺を渡し、日本山岳会の謝辞を学校当局に伝えてくれるよう頼んでおいた。

この日、中腹以上は雲に隠れていたが、トンネルを抜けたイタリヤ側はいいさか天気がよく、アオスタまで下り、グラン・サン・ベルナル峠のトンネルを抜けて、マルチニからフォルクラ峠を越えて、日暮れ方、宿に帰った頃、連峰が全貌を現わし、正面のエギーユ・デュ・ミディの頂上、駅の三つの灯が輝き、三日目の夜空にモン・ブランの頂上がかすかに仰がれた。

④ 立山、飯豊、尾瀬

五十嵐 力

二三号台風の直後、立山周辺を訪ねて見ました。この地方の被害は相当のもので、弥陀ヶ原のホテルの木造部分の屋根は吹き飛び、小さな小屋からと

んだと思われる布団や枕等の夜具が散乱していましたが、一の越、剣御前小屋の頑丈な便所の屋根も吹飛ばされてそれは無惨なものでした。天狗小屋の佐伯氏の話だとホテルの風力計が七十mを指したままバアになっていてたそう、其の風の強さは小屋始まって以来との話でした。

原はワイイチヨウの黄色いじゅうたんに包まれ、其中に、リンドウの紫がわずかに彩を添え、登山客も殆んど見る事も無く、あの夏の盛況さが嘘の様に唯静寂そのもので、剣岳の岩肌も紫ネズ色の独特の色を秋の空に浮はせていました。

雄山の頂上に建築中の社は、立山の美観を損ね、室堂から見ると雄山の魅力が半減して、とても目ざわりで気になりました。其の内に雄山の腹中に観光トンネルが掘られたとか、全く当事者の常識がうたがわれます。

聞くところによれば飯豊にもスカイラインを通す計画があるとか、私達地元の方でよく耳にします。若し山がだたら大変な事です。其の飯豊の山麓にある飯豊温泉の小屋も二四号台風で吹飛ばしてしまいました。台風の山々では我々の想像を絶する強風が吹きまわっていたのでしょうか。

八月の末に上信、荒船山から八風山、軽井沢、渋峠、志賀と歩いて来ましたが、渋峠では車のホコリに悩まされ、白根山にはハイヒール、スカート、サンダル族がたむろし、山々は人間の力によって続々と壊され、白樺の木がホコリで白くなった志賀辺りでは全くガカリでした。尾瀬は来年から禁止区域が増えるそうだし、全く憤懣だらけです。二、三作品を作ってみましたが、御笑覧下さい。

◆(五十嵐氏作の歌と詩が一二頁にあります)

ローガン余話

6月18日のこと

川上 隆

アンカレッジの米陸軍基地、フォート・リチャードソンのわかれの宿舎に、現在徴兵で米陸軍上等兵としてフォート・リチャードソンに赴任しているアメリカ山岳会々員J・ウィリアムソン(27才)が訪ねてきた。こちらの隊員は上が二佐(中佐)、一番下でも三尉(少尉)なので基地内であう場合は、彼自身階級を意識しなればならない立場にもあり、いっこうに打ち解けられず、山の話も弾まないで、今日われわれの宿舎に招待したわけである。といつてもこれからの入山を控えて、トラップに荷積みする品物の区分け等、なにかとあわただしく、お粗末なものでないか出来なかったが、彼の一六四四年マッキンレー東南稜初登攀のことや、われわれのローガン北稜のこと、特にローガン北稜については写真の前にして、ルートをあこれ検討しあうなど話が進むうちに熱がはいり、時のたつのも忘れて談笑しあう結果になった。彼は徴兵前、高校の国語の教師だったとかで、われわれの下手な会話をなんとか理解しようと勉めてくれているようであった。

彼もローガン峰にはぜひ登ってみたいが、出来ればローガンの西側より頂上氷河帯をぬって、西峰、中央峰、東峰とスキー登山をやってみたいとか、また南極にもぜひ行きたいのだが、今年からアメリカ山岳会が南極エクスプローズを中心として積極的な登山活動にはいるということだった。

われわれの場合、食糧について六〇〇mの高度はそれほど食生活に影響がないと考え、特別な流動食は考慮せず、一日3500cal強としたのであるが、彼らは五〇〇〇〜六〇〇〇mの山で、三〇日前後の山行では一日3000

calぐらいで十分ではないかということであった。体力の相違というか、蓄積エネルギーの違いとか、振り返ってわれわれの場合を考えてみるとやはり三五〇〇calは必要であった。問題はどの程度消化吸収されるかどうか。

氷河の歩行については、特にスノウ・カバード・グレイシャーの歩行には神経質すぎる位の慎重さが必要で、安全だと思われするような場所でもロープを必ず使用。(安全と思われるところで)アンザイレンは四人でひとつの隊を組む、ロープの間隔はそれぞれ二〇〜二五mあけ、トップは二mぐらいの竿をもちヒドン・クレバスを探しながら歩く、ラストは二〇〜二五mロープを引きずり、もしクレバスに墜落したものがでたらこの引きずっているロープを墜落者にたらし、自己確保を十分にしている。二、三名で引きあげる。要は二人だけで一人が墜落した場合、残りの一人では墜落者を救助出来ないのだということであった。このことは、日本でも内容的に少々違いはあるが、金坂一郎著「雪山技術セミナー」に詳述されている。

氷河上におけるテントの設営は、当然のことながらヒドン・クレバスや、氷河雪崩の危険を十分に避けられる安全度の高いところでなければならぬが、氷河雪崩についていえば、アラスカやニューコン地域の場合、常識的には大きい雪崩で落下地点より氷河上のあるので、そのような雪崩の予想されるところでは、テント設営地を落下地点より二〇〇〇m以上は離さなければならぬということであった。実際にわれわれはローガン氷河上、インデペンデンス・リッジ末端部、ローガン北壁より離れること三〇〇〇mの地点にBCを設営したのであるが、北壁から三〇〇〇m以上の落差をもって落ちてくる氷河雪崩は、集中的な落雷のような凄まじい音をたてて二〇〇〇mちかく走りぬけ、時をかわらず雪崩しているようであった。しかし雪崩発生の際についてある程度注意して観察してみると、温度の安定している時は少なく、降雪中、温度が変化しはじめから三時間ぐらいの間が一番多く、しかも規模の大きい雪崩がでるようであった。

嗜好の問題になると、タバコについては、J・ウィリアムソンだけでなく、時期的にわれわれと前後してローガン南面より中央峰の登頂に成功するという偉業を成したカルフニアのパーティも、タバコは吸わないということであった。J・ウィリアムソンによれば、酒は少々たしなむが、タバコを吸わず、凍傷にかかりやすいとかで全然吸わず、吸うべきではないということであった。以上アラスカで会ったJ・ウィリアムソンを中心とした二、三の見聞でしかないが、彼らが登山という行為について当然のことながら、彼らなりに非常に真摯で、ストイックな生活態度をもち、しかもごく自然な姿で自己をきびしく規制していることに感心させられたのである。六月二十九日、一路チチナに向って出発、ローガンへの第一歩をしるすにあたって、あらためて心を十分に引きしめた次第である。

× × (完)



ローガン峰写真集

- (A) BCより望む「独立稜」の全貌(大須賀隊員写す)
 (B) C1上より「独立稜」上部(川上隊長)
 (C) C1よりルーケニア峰、前面はローガン氷河(川上隊長以下同じ)
 (D) C2, 3間のトラバースと大須賀隊員
 (E) 同上よりのローガン氷河とマッカーサー峰



フランス登山界の近況 (I)

近藤 等

リオネル・テレイの死

九月十九日、リオネル・テレイは、グルノーブルに近いヴェルコール山塊のジェルビエで不慮の死をとげた。ヒマラヤ、アンデス、アラスカ、アルプスで彼はど縦横無尽に活躍したアルピニストはいなかった。彼は戦後の最も偉大なアルピニストであったと云えば異論もあるが、世界の山々について最も経験に富んだ登山家であったということは事実である。

四四年の生涯で彼は活躍した海外遠征は十二回、一九六二年のときは春にジャヌー、夏にペルー・アンデスのチャカララ東峰、秋にはアンナブルナ山群のニルギリと一年に三回遠征し、それぞれ初登頂に成功しているタフぶりである。

その彼が二〇〇メートル足らずの、彼にしてみればグレンデのようなジェルビエで、同行の若いガイド、マルク・マルチネチ(二六才、昨年テレイとアラスカの難峰 Huntingdon(3,733 m)に初登頂、プレチエール西壁の冬季初登攀者)とともに墜死したというとは、アンナブルナの同僚で、岩登りにかけては天才的だったジャン・クジィがやはりグレンデのようなビック・

ド・ピニールで、たった一つの落石のために若い生涯を終ったのと思いがあわせて、アルピニストの運命が、真にはかないケースが多いことを暗示してはいないだろうか？

テレイが最後の日に登っていたジェルビエの東壁は、もっぱら人工登攀によるルートで、使用されるピトンは約百本、第六級の難場ではあるが、彼らにしてみればトレーニングのグレンデである。頂上に抜け出る最後のオーバーハングのところから、壁の下部まで三五〇メートルほど墜落したのが死の原因となったものである。なぜ墜落したかは不明である。

アンナブルナ登攀隊員七名のうち、ドクターのウドナがまず自動車事故で、つづいてラシニナルがヴァレ・ブランシュのクレバスに呑みこまれ、クジィは落石、そして今度はテレイがまたここに彼らしくない最後をとげてしまった。

昨年はエギーユ・ヴェルトの遭難で、わたしが国立登山学校で世話になった四人の教官を失ない今夏はシャモニの山で、その数日前には拙宅で元氣よく談笑していた三人の若い日本のアルピニストを失ない、いまた、あの快活そのものだったテレイの死に接して、わたしは悲しい思いでいっぱいである。

国際アルピニスト集会

での登攀

今夏、会員、倉知、君島両君が参加したこの集会での登攀リストがフランス校長から送られてきたのでその主なものを列記する。

グラシ・カピニヤン東壁

四バーティ

ピオサセ北壁

二バーティ

ツール・ロンド北壁

一バーティ

トリオレ北壁

一バーティ
エギーユ・デュ・ミディ南壁

九バーティ
ダン・デュ・ジェアン南壁

一バーティ
プテ・ジョラス西壁

二バーティ
プレチエール西壁

二バーティ
ドリユ、ボナチ稜

二バーティ
アルジャンチエール北壁

一バーティ

参加は二五ヶ国、五十名であった。本年は天候が不良であったが、これだけの成果をおさめていることは、参加者の実力のレベルが非常に高かったことをしめしている。登攀ルートと登攀者の名前を引き合わせてみると、大半の参加者が六級の登攀をこなしている。わが国の大学山岳部およびOBがこなししている登攀は岩場に関するかぎり四級とまじりと思われる。日本山岳会がその傾向を好むと好まざるとを問わず、アルプスでの岩登りは高度の発達をとげ、この大会の参加者が六級のレベルの登攀の実力者が大半なのであるから、次回(一九六七年)の大会には、このレベルの登攀をこなせるテクニクの持主を送り出したいものである。

ジャヌー報告書

久しく出版を待たれていたジャヌーの報告書が六月に出版された。一九五七年秋の偵察五九年の第一回遠征をジャン・フランコが執筆し、六二年の初登頂をリオネル・テレイが執筆している。

写真も多数挿入されていてこの難峰登攀の進展の様子がよく分る。ヒマラヤに関心のある人にとっては必読書であろう。来年、日本版を出す予定ではあるが、まだ決定はしていない。(Jean Franco et Lionel Terray: Bataille pour le Jannu, Gallimard, 20 F)

(以下次号)



(D)

リオネル・テレイの遭難

小野 尚俊

九月二十三日付、パリの夕刊はLionel Terrayの死を報じました。ジャヌーその他の登頂者テレイ(44才)は九月二十二日夜、グルノーブル市に近い Vercois (ヴェルコール山塊) 山中で墜死体となって発見されました。シャモニのガイド Marc Martinet (26才) と共に Gerbier (ジェルビエ、二二七m) 峰の壁の登攀中、目撃者はなく、五〇〇mの壁のうち一〇〇mを残すところで落石にあつて四〇〇m墜落した模様です。

アイガー北壁またアイガーのウォカールポイント、北エブロン登攀の記録をもち、アルプスに数多くの輝かしい記録をもつ彼は四〇〜四四才の間がアルピニストとしての年令限界だと常々語っていた由ですが、七月二十五日四十四才になったばかりでした。二十三日夜のテレイはトップに彼の死を報道し、来日して会にもおなじみのモリス・エルゾグ氏の追悼の言葉を流しましたし、フランスの大衆紙フランス・ソワールはトップ記事として扱い、三面を割いて山の英雄の死を惜しんでおります。文学的咏嘆に満ちた記事には今迄聞かないようなさなかなった彼自らが、その著書に「Conquérant de l'Inutile (空しきものの征服者)」となすけた彼が、手慣れたジェルビエで、墜れるとは! と慨嘆しております。エルゾグ氏も「兄弟の死」と語ってそのカメラロードの死を惜しんでおります。

(九月二十四日・パリにて)
101, Bd Raspail, Paris 6, e
France



(E)

◆ 会 員 通 信 ◆
(B)

清水周

時だった。かねて色々案内書で調べてあったが、ここ宿があるかどうかはわからず、車中でも不安だった。下車してみても想像したより淋しいので、駅に並んで三、四軒の人家があるきり、宿らしいものは一軒もない。やっぱりそうだったのか、かくなる上は前宮社務所まで歩くかと考えたが、念のため職員にきてみた。駅員は私の顔をしげしげと見て、都会の人に向くかなあと困ったような顔をしていた。「そまつな宿ですが、それ一軒しかありません」と遠慮勝ちに案内してくれた。看板一つかかっているではない、細い露路の奥、枳構内をくぎる枕木の柵にくっついてその家があった。

入った土間には薪や斧が雑然とちらばり、つづいて囲炉裡の座敷には仏壇や富山の葉袋などがある。ここでお客

その夕刻下りしにて、あまりの人情の純粋さにほだされたり再泊する。山で喉が渴いたり疲れたりもしたから、宿の親父と一本のビールを呑み合つたら、駐缶を開けてくれ、翌朝勘定をと云つたら、今日は弁当付でないから一泊二食付で四百円だね。晩酌はノークラント、道楽で商売をしていると思えない。

同じ岩手の宿。もう東京へ帰る最後の泊りで温泉にしたかったが、盆の帰省者が上京で列車はひどい混雑たという。座席券などとうに売切れとあつて

は、駅前旅館に待機しないと座れないらしい。山の帰りは夜行列車と決めてる私は、はからずも駅前旅館を選定する羽目はなかった。何しろ十日も山を彷徨していたのだからズボンもシャツも泥だらけ。どここの街でもそうだが、駅前正面には三階建て位の高層ビルに、金文字を書いた大旅館が構えているが、この姿でそこへ踏み込むのをガラにもなかつた。そして横通りを曲って小さそうな宿を探した。

何でも宿は安閑でのとり決めが大切だ。いくら泊めるかとときくと、出てきた婆さんが四百五十円という。前が前だっただけに、岩手は宿が安い土地だわいと怪しみもせず、靴の紐を解いて。室に通ると今日はお盆で従業員が家に帰ったから、食事はつけない、仕出入屋から別計算でつくださいと。素泊りの値が、安さの感覚が大部分

「おれは、ラジオ付のいいですよ」

「その上の値段ならテレビ付の室でうと払って宿は出たがどうも釈然としなない。本当にきき違ひであらうか、あの時の問答を反芻してみろ。」

「四百五十円とはバカに安いな」

「それ以上は、ラジオ付のいいですよ」

「あゝそのラジオさえ要らぬよ、山で疲れたからすぐ寝るよ」
「そうでしょうとも」
これが支払の時は

「わたしは九百五十円と八百円とありますと云った筈です」となつてしまひ、八百円という値も今初耳だが、それはいいとして、テレビ付なら高い、ラジオ付なら安い、それなのに私は高い値でラジオ付に泊つてゐる。これは先方に嘘がある証拠だ。きき違ひではない。

涼朴の岩手々々と思う一般の錯覚に乗じて、恐らくは東京あたりを食ひつめた者のあくどいなりわいであらう

か。この婆さんの言葉は東京弁だった。私は鶴岡、湯の田、生保内、後生掛、藤七とたどって岩手県にきた。この旅でここが一番高価について最もひどい不快を受けた。

(完)

×
×
×

茶谷東海

一、記念山行
高尾山駅(ケーブル)より小仏城山、小仏峠を経て相模湖へ徒歩三時間、七十五才より三十才まで女性二名を含めて十八……

ちんぐるま、穂を立て寂し秋の
野に、影おとしたる立山の嶺
霧吹かば、みくりが池に波の立
つ、秋の立山静かなりけり
一の越、黒部の風の吹上る
彼の地に聳ゆる槍ヶ岳かな

ちんぐるま、穂を立て寂し秋の
野に、影おとしたる立山の嶺
霧吹かば、みくりが池に波の立
つ、秋の立山静かなりけり
一の越、黒部の風の吹上る
彼の地に聳ゆる槍ヶ岳かな

秋の日の燐の山に降る雨は
強く激しく降りにけり
池糖の水に弧を画き
燐は雨に煙りたり
煙る燐に雨が降る
彩ずきそめた秋の日の
ひねもす篠つく雨の日の
尾瀬は雨の詩を唄う
雨の詩を唄う

秋の日の燐の山に降る雨は
強く激しく降りにけり
池糖の水に弧を画き
燐は雨に煙りたり
煙る燐に雨が降る
彩ずきそめた秋の日の
ひねもす篠つく雨の日の
尾瀬は雨の詩を唄う
雨の詩を唄う

な登るのが老年層には一番楽である。福島(三)霊山(りょうぜん)を勧める。福島駅より東へバスで二時間、霊山神社下から徒歩三時間で山を一周できる。北畠親房の史蹟に富む。四日川峡の大牧ダムから五箇山へ出るコースは素直である。特に大牧温泉の露天風呂から見た対岸の紅葉は美事である。

な登るのが老年層には一番楽である。福島(三)霊山(りょうぜん)を勧める。福島駅より東へバスで二時間、霊山神社下から徒歩三時間で山を一周できる。北畠親房の史蹟に富む。四日川峡の大牧ダムから五箇山へ出るコースは素直である。特に大牧温泉の露天風呂から見た対岸の紅葉は美事である。

終りに席上の話題を二・二附記する
・田部重治、海軍経理学校教官時代に
英人キングダレークの名エッセー（東
方巡遊記）の一節砂漠地帯の中の山
の話をしたのが祥会生れた動機であ
った。又同校で「海軍軍人は旺盛な愛
国心を持っているが、その国たるや抽
象的なもので、実際の日本の国土をあ
まり知らない。登山によって国土を知
る必要がある」と話した校長が生徒
の登山に賛成したという出がある

・福岡新（毎経五期元少

て寂し秋の
立山の嶺
池に波の立
りけり
吹上る
出かな

將)、梓会員の年齢層か
ら見て今後は話題を山に
限定せず巾を広くして有
志が多数参加されるよう
にしたい。

・茶谷東海(海経十三期
元大佐)、(一)先月八甲田
大谷の頂上を登る。後、

大丘の頂上近く清霧の中
でねじり鉢巻の松方三郎
さん（元三笠保存広報委
員長・現評議員）にお会
いした。東麓の田代平は
一遊の価値がある。明治
三十七年青森連隊雪中行
軍遭難の銅像も程近い。
六月雲取山莊横の田部
重治先生のレリーフを見
に行った。中左派であ

る。雲取へは三条の湯かな登るのが老年層には一番楽である。○(雲山)りようぜんを勧める。福島駅より東へバスで二時間、雲山神社下から徒歩三時間で山を一周できる。北畠親房の史蹟に富む。四庄川峡の大牧ダムから五箇山へ出るコースは素直である。特に大牧温泉の露天風呂から見た対岸の紅葉は美事である。

×

×

×

★1905 六十周年記念★ ★祝賀会報告

★1965★

明治三十八年十月十四日、飯田町の富士見楼において山岳会創立の最終的な打合せ会が開かれたという記録が残されている。

この日をもって創立記念日とし、日本山岳会創立六十周年の祝賀会を椿山荘において開催した。

当日は相續々刻より雨となったが、内外知名来賓五十一名、会員三十二名、計二十七名出席、国際色豊かな祝賀会が催された。

秩父宮妃の御臨席を仰ぎ、第一部、式典、第二部、園遊会にわけ開催、先ず一部の式典は松方会長の挨拶に始まり、永年会員武田久吉氏他二六氏に對し、永年に亘る会への御尽力を謝し、銀杯のついた会員章が贈られ、次いで功労者として武田久吉氏他二二氏に記念品が贈呈された。続いて名誉会員として日高信六郎氏、藤島敏男氏、神谷恭氏、藤木九三氏が推薦された。

ついで秩父宮妃殿下のお言葉があった。こよなく山を愛し、山岳会によき友を得られた故郷下の思い出から、最近続発する遭難事故を深く憂慮され、その防止についての心のこもったお言葉には、「同一層の感銘をうけて式典を終了した。」

続いて園遊会は噴水の間に席を移し、長老近藤茂吉氏の発声の乾杯により、第二部が始まった。杯を重ね宴會となり、来賓として中華民国台灣省体育会山岳協会周白鍊夫人の祝詞、同夫人より豪華な、祝日本山岳会六十周年「青山不老」と刻んだ楯を松方会長にして柳洪烈博士が、洪鐘仁韓國山岳会々長の祝詞、並びに祝いの楯の目録「螺鈿漆器記念楯」を松方会長の手に、

又、会員永原輝雄氏（一六九三）からJACマークの木彫が寄贈された。次にネパールのパンダリ大使、尾関全日本山岳連盟会長等の祝詞が続き、更に特に昔われわれがお世話になった大町對山館の故主瀬田太郎氏の息女美江氏、飛騨案内人の古強者、松井憲三君有明にその人ありと知られた名案内人、大和由松君等の紹介があった。地方会員との久方振りに旧交を温める会員相互の交わり、英國山岳会員ガウイング氏、印度大使館武官ナンド大佐、同夫人及びアメリカ大使館マクドナルド氏等を囲んでの交歓は仲々つきずその時を忘れ、久頃深田久弥氏の閉会の辞によつて盛會に幕を閉じた。

成（二〇三）、牧野平五郎（二〇六）、冠松次郎（二二七）、田部重治（二四三）、矢田城太郎（二四五）、近藤茂吉（二六〇）、中原繁之助（二六七）、岡基徳之助（二七二）、佐々木高美（三〇六）、斎藤兵三郎（三三三）、植有恒（三四一）、若林裕治郎（三七二）、藤山愛一郎（三九五）、斎藤直一（四〇〇）、河本清（四〇六）、山口季次郎（四一三）、西井常造（四二二）以上三十七名。（以上括弧内の数字は会員番号）

功労者

・名誉会員
武田久吉、山川黙、辻村太郎、三枝守博、鳥山佛成、中村清太郎、冠松次郎、田部重治、近藤

記

永年会員（五〇）以上在會者
武田久吉（五）、山川黙（旧姓河田、七）、北沢基幸（二二）、辻村太郎（二二）、三枝守博（三三五）、鳥山佛成（七三）、武山良次（一一四）、日高信六郎（一四二）、中村清太郎（一五三）、高木菊三郎（一六二）、河合良



日本山岳会60周年記念パーティー

第一部・松方会長の挨拶



第二部・中央は秩父宮妃と横さん

後、伊藤弥十郎（福島）、高山忠四朗（信濃）、織田収（山陰）
今同名誉会員に推薦された神谷恭、藤木九三の二名が含まれ、計三十三名。
・名誉会員推薦者
日高信六郎（一四二）、藤島敏男（七一〇）、神谷恭（七四四）、藤木九三（八九三）以上四名
招待出席者（順不同）
針谷 正之（外務省文化事業部長）
伊達 邦美（外務省情文第二課長）
吉沢清次郎（初代ネパール大使）

殿村 秀雄（エッセイスト）
別宮 梅子（元会長別宮昌俊氏夫人）
百瀬 美江（百瀬慎太郎氏令嬢）
平林 次男（上高地山荘管理人）
村上 守（同右 委員）
松井 憲三（元案内人）
大和 由松（元案内人）
訪日韓國登攀隊、柳洪烈隊長以下八名
中華民國台灣省体育会山岳協会周員秋冬（周白鍊会長夫人）以下六名
B.R. Bhandary（駐日ネパール大使）
Colonel C.M. Nanda（駐日インド大使武官夫妻）
Richard Gowing（英國山岳会）
H.A. Mehdiadzh（テラン山岳会）
John F. McDonald（アメリカ大使館教育交流部長代理夫妻）
Arian Holter（英國大使館）
Juan Sopena 神父（上智大学）
S. De Roy (D.T.I 支局長夫妻）
（以上五十一名）

当日の出席者（順不同）

曾原久蔵、高木菊三郎、田中正智、同テキ子、確井橋造、山下久男、折井健一、鳥山佛成、牧野 衛、藤島進、松方三郎、同 ぼし代、斎藤健治、同文子、松田雄一、同 柳子、大塚博美、深田久弥、同 志げ子、田中弘美、高橋定昌、細川沙多子、中野満飯野、亨、同紀佐子、橋本 正樋口一男、平山武志、斎藤かづら、塚本圭一、同 ユキ、田崎市松、同 幸子、早川種三、成瀬岩雄、中川 武、小倉薫子、田辺 寿、川森左智子、池元善秋、高山忠四朗、菅原尚司、吉沢一郎、山口節子、菊地文雄、平沢亀一郎、辻村太郎、青木 昇、同 瑛子、村井米子、小味秀純、川崎 巖、関口周也、村井田博、藤木九三、同 富子、石原憲治、織田 収、近藤 等、藤森元夫、丹部節雄、上村 茂、藤島敏男、同 紀子、三辺夏雄、城山正三、住吉仙也、安川茂雄、佐伯富雄、長尾佛夫、同 佳子、板倉勝正、竹田寛次、芳賀孝郎、辻井秀一、藤井運平、三井

高周、同 礪子、交野武一、望月達夫、同 薫、永原輝雄、神谷 恭、同カネ、吉阪隆正、佐藤一栄、藤島 玄、清水周一、外山義夫、中 保、早川義郎、小原晴子、安彦六郎、諸岡一、伊藤弥十郎、浜田一馬、同 勝子、亀田与三、加藤泰安、同 ひろ子、松本善二、奥山文次、中島正文、横有恒、町田立穂、渡辺公平、井口正男、岡田喜一、阿部節子、中尾正武、尹官炳、荒巻広政、辰沼広吉、同 寿恵、河野義雄、宮下秀樹、同 敦子、勝田房治、同 京子、佐藤久一、同 孝子、宇田川久太郎、三代沢本寿、岩崎京二郎、富田美智子、西堀栄三郎、同美保子、安藤 鐸(末松大助代理)、三田幸夫、同 静子、三井松男、山崎安治、野口末延、今井雄二、同 喜美子、坂倉登喜子、黒石 恒、鈴木文子、島田 興、同 順子、田辺博道、三浦多美子、村尾金二、同 義子、松本義夫、古武正子、北 博正、茶谷東海、佐藤達夫、高遠 宏、同 千栄、村口三郎助、金子泰助、山口健児、石村実、同 裕子、小泉 満、渡辺武彦、羽田栄治、根本洋子、加藤一、津田周二、松本熊次郎、山崎金二郎、関根吉郎、太田 敬、岡本 竜行、今井嘉道、同 直子、福井正吉、竹内義夫、山本朋三郎、今西寿雄、牧野四子、同 文子、小里頼忠、鈴木 昭、同 敏子、横山厚夫、山下一夫、児島勲次、齊藤清太郎、矢田城太郎、田口二郎、栗栖勝雄、近藤恒雄、二本信次、進藤波男、同 みち子、小山 智、同 美智子、桑原武夫、中里 巖、奥川雪江、近藤茂吉、同 夫人、柴田晴彦、沢井貞夫、日高信六郎、藤野欣也、川越孝次、川村博道、増田洋子、今村正二、大沢 薫、杉浦耀子、織内信彦、脇坂 誠、前田彩寿、山野井武夫、網蔵志朗、村木潤次郎、田村扇一、川喜田二郎、芳野超夫、同 菊子、米田 茂、小堤達雄、直井八十吉、隈部恵子、沼倉寛二郎(以上二二名)

◆ 記念講演会 ◆

昭和四〇年一〇月一五日、毎日新聞社の後援で、虎ノ門、久保記念講堂において開催した。
当日は国会デモ行進の混雑で憂慮されたが、定員二〇〇名を充す盛会であった。
午後六時五分、加藤泰安氏の司会によって開会する。講演は先ず松方会長「登山界と登山者」という題で、例のユーモアを混えた名調子で始まった。
プログラムの二は「日本山岳会創立前後」と題して名誉会員武田久吉氏の得意の下町弁で遠慮、会釈もなく、誰かれの区別もなくこき下ろす毒舌は、一同の爆笑を巻き起した。
休憩後、三、串田孫一氏の率いるコンセル・ゼフィールの笛奏による一七世紀の珍らしい古典曲は、優雅に、そして牧歌的な詩情を湛えた。
四は、「六十年を振り返って」と題して植有恒氏が登壇。わが国の近代登山とともに歩まれた氏だけに、若い岳人の胸を打つものがあつた。
五は、西丸震哉氏の指揮するフォレスト・ワンダラーズの混声コーラスが、雪山讃歌に始まり、未発表の数々の曲をたっぷり聞かせ、会場は和やかな空気に包まれていった。
最後に、桑原武夫氏の「登山と文化史」は、学びとろりと期待した講演だけに、聴衆を大いに感動させ魅了し、時間が余りに短かったことが惜しまれつつ終了された。
閉会、九時一五分。当夜は前日祝賀会に出席の地方在住の殆どの会員が老席されたことは勿論、名誉会員、長老の方々が多数参集されたこととを附記する。
(沼倉寛二郎記)
尚、当日の講演内容はテープに収めてあり、このテープは各支部及び希望者に貸出し致しますので、お申下さい。
(担当・大塚理事)

◇ 記念品頒布

会員佐藤久一郎氏制作による創立六〇周年記念品は、見事な青銅の文鎮である。(頒価一個金八〇〇円、前会報一〇〇〇円は誤り)

残部に限りがありますので希望者は至急お申込み下さい。尚、各支部で取纏めてお申込み頂ければ幸甚です。
(担当・小味、田辺)

記念写真頒布

記念祝賀パーティ当日の写真をご希望の方には、キャビネ版一枚一〇〇円でお頒ち致します。
見本はルーム並びに各支部にありますので、前金でお申込み下さい。
(担当・関口)

塚本閣治氏逝去

元会員塚本閣治氏は九月二十五日午後八時半、食物が咽喉につまり、東京都目黒区下目黒四ノ九四七の自宅で死去。享年六十九才。

氏は大正中期、東京美術学校に在学中、五十銭銀貨のデザインに応募して一等に当選したことがある。

塚本商會社長、日本山岳写真協会展、全日本写真連盟顧問、日本アマチュア・シネスライド協会展。昭和三十七年に紺綬、紫綬褒章を受章。

その優れた山岳写真、小型映画を以て登山界に貢献した功績は大きい。深くその冥福を祈るものである。

第三回月例海外登山会 懇談会

欧州アルプス地区
テーマ

「アイガー北壁のアクシデント」

日時 九月六日(月)午後六時三〇分

於 本会ルーム

出席者

・グスト

・茂野徹太郎、近藤等

・会員、渡辺文明、倭島進、岡義雄、

・斎藤かつら、鈴木淳平、倉知 敬、高

橋信成、真家雅彦、吉沢一郎、松田

雄一、大塚博美

全日本山岳連盟登山隊の一員として、

アイガー北壁登攀取材に同行した

会員の読売新聞運動部記者の茂野徹太

郎氏を招いて、生々しい体験談を中心

に懇談会を行った。

特に今年は日本からアルプス方面に

七隊向い、この地区での事故死は四名

にのぼり、国内での批判がとかく取沙

汰されている折から、今回の懇談会は

興味深いものがあつた。

先ず茂野氏から登頂者高田氏の八月

十四・十五日の遭難当時の手記が読まれ、

それについて詳しく説明があつた。質

疑応答の中から主なものを持つて見る

と一登頂者の高田氏がザイルパートナ

ーの渡部氏を遭難現場に置いて連絡に

下った処置について

「難かしい問題で、これについてい

ろく意見もあることを聞いている

が、現地では当時の状況からあれ以外

高田氏としては手段はなかったと思

う」

高田、渡部両氏が速成登攀隊といわ

れている点について、単独でアイガー

の北壁に登りに来ていた高田氏の意見

は、「一流のクライマーなら、誰とでも

ザイルが結べるものである」という

ことであつた。」

「悪天候なのにどうして登ったのか」
「高田氏の意見は、北壁の登攀は賭けである。いつまでも待つていては登れないからだ。こういうことでは日本が一般的にいえるところではある日本から来たんだし、この機会にどこか登らねば、という気持があつたのは当然であるし、又多くの隊が登りに来ているので競争意識もあつたのではないか」
L・テレ、J・フランコなどのベテランに会つて意見を聞いて見たところ、今年止めた方がいい。九月に機会があるかも知れない」ということであつた。

アイガー北壁に登り切るには、七日間の晴天の後、登攀に必要な尚三〜四日間晴天が必要なのである。

現地にいた外国隊はどうであつたか
スイス、英国、独逸、ベルギーなど
グリンデルワルトに來たが、条件が悪いので直ぐ引き上げた。彼等があつさり引き上げられる環境にあるのが、羨ましいと思つた。これに引き比べ日本からはるばるやって来るというあつさり引き上げられないだろう。

北壁は日本人に登れるであろうか
これについて近藤等氏は「条件さえよければ登れる。技術的には北壁より難かしいところを登っているの、現在の日本のレベルで行けると思う」
又茂野氏は「日本人には難かしいことが多いと思う。それは条件次第ということであるが、この壁に登るには馬力とスピード、つまり強靱な体力と秀れた技術が必要で、十日間に亘る晴天の機会を掴むということは、日本から登りに行く隊にとっては、地元の外国人に比べ分が悪くなるので、難かしいといえるので、日本人は私の経験ではヒマラヤ向きという感じがする」

その他、いろいろこぼれ話があり
今後アルプスに向う人達が多くなると
思うが、これについて近藤、茂野両氏が種々希望を述べられ閉会した。

(大塚博美)

★支部情報★

▲東海支部▼

役員変更

東海支部のアンデス学術遠征隊には石原支部長以下十名の役員が参加するので、これに先立ち東海支部では九月五日臨時支部総会を開催し、アンデス遠征中の事務代行者及び支部委員の追加を左記の様に決定したとの連絡があったのでお知らせします。尚石原支部長以下十一名の先発隊は十月十一日川崎汽船のボリビヤ丸にて横浜港を出発、現地へ向った。

記

支部長代理 木村 哲夫
副支部長代理 田中 元
支部委員 田村 俊介
大橋 喜治

▲静岡支部▼

九月二士会は、九月十一日富士朝霧牧場で現地集会を開いた。当日は台風その他で参加者も僅か七名であったが、東京より松本熊次郎氏も出席され仲々の盛会であった。

特に富士の裾野の広々とした牧場内、しぼりたてのミルクに牛、羊、鳥肉によるバーベキューは、此処ならではの、又富士の端に出る月は、秋風になびく薄と虫の音に包まれ、

明月や富士のしとねにバーベキュー月の雲朝霧の原ここあり
と句も出る程に、夜の更けるのも忘れ

翌日は、片蓋山へ登る計画で牧場の車に送って貰ったが、途中車が行けなくなり引き返し、天候も崩れて来たので、人穴を見学して帰途についた。参加者は松本熊次郎、牧野衛、川端信治、杉山晴信、長田義則、稲葉雅子、岩永安雄。(岩永記)

▲東京支部▼

十月六日 役員会

出席者：沼倉、鈴木(郭)、鈴木(和)、小野、関谷、村井田、小味、野萩、西丸、広谷、富田、山口、中、松永

議題と報告

①六十周年記念山行について

十一月三日箱根(明神・明星岳)登山と決定、方法について打合わせを行う。

②大樺沢登山技術講習会会計報告。

萩野委員よりの報告につき了承。(松永)

国立公園

指導員について

厚生省国立公園局長により委嘱される首題の国立公園指導員について東京都建設局公園緑地部より推薦方を依頼されましたので、本年度は次記五名を推薦しこの程、委嘱されましたので報告します。

沼倉寛二郎、折井健一、中俣、関口周也、山口節子 以上。



THE HIMALAYAN CLUB

P. O. BOX No. 9049

CALCUTTA - 16

・ヒマラヤン・クラブ

日本支部集会報告:

日本は世界でも有数のヒマラヤ登山国であり乍ら、適当な紹介者に恵まれず、戦前は伊藤源氏のみであった。戦後は一九五二年に西堀氏が入会したが最近まで会員は殆んどなかった。一九六一年に神原氏が入会されてから、徐

々に会員も増え現在は十二名になり、一九六四年からは三田幸夫氏が本部から正式に Japan Section の Honorary Local Secretary として推薦され、とうやうや日本支部も公認されるに至った。そこで去る十月二日午後、日本に於ける初のヒマラヤン・クラブの会合を国際文化会館で開催した。

出席者は三田、深田、松田、神原、山野井の五名。席上、次の様な申合わせを行なった。

(一)入会希望者には積極的に加入をすすめる。

(二)会費は十一月に三田支部長が一括してまとめて送金する。

(三)当分の間、日本支部としては支部費は徴収せず、支部の機関紙も発行しない。但し会員が五十名を越える様になった場合には News Letter の発行を考へる。

四 適当な時期に Annual Dinner を行う。

尚ヒマラヤン・クラブの入会金は三〇ルピー、年会費はインド以外に在住するメンバーは二〇ルピー、(約一、五〇〇円)で、ヒマラヤン・ジャーナル(年一回刊行)の他不定期に発行されるニュース・レターが無償で頒布されます。入会を希望される方は、三田又は松田宛宛連絡下されば Application for Membership をお送り致します。(松田)

直通電話開通のお知らせ

長らく交換台終了後の夜間(午後八時以降)の通話が不能のため御不便をおかけしておりましたが、此の度本会ルームに、従来の代表電話四〇二局六一五一〜四番の他に、直通電話として、四〇四局七六五七番が入りましたのでお知らせ致します。

NTVの「アイガー北壁」

山に対する考え方に疑問

毎日新聞40・10・12朝刊に元会員角田明氏(毎日新聞編集局次長)が、NTVの「アイガー北壁」について書かれたので、一つの意見として御紹介しておく。(転載諒解済)

○クライネシャデックで私が見たアイガーの北壁は暗く悪魔的な様相だった。しかし北壁以外、人も景色も、いかにもスイスらしく光に満ちて明るかった。

○ところが10日夜、日本テレビ芸術祭参加ノンフィクション劇場「アイガー北壁」は、はじめから暗い。山登りはもともと楽しみを目的としたスポーツだから、遭難発生までの前半は、もっと明るくていいはずである。まずその暗さから、この作品をまとめた人たちの、山に対する考え方に疑問を感じさせられる。

○ナレーションは「栄光」という言葉を使っていたが、登山者が求めるのは、そんなものではなく、だれに知られる必要もない、自分のための、ささやかな満足である。悪天候でむなしが帰っても山のフットロを感ずることができた満足がある。栄光などと思うから、悲壮感が先に立ち、あせり、陰気になる。隊員の顔さえ、そうした角度からばかるとらえられている。

○後半は高田、渡部組の遭難のドラマだから見たいがある。渡部氏の遺体がすでに下に落ちていたのを知らず、山頂へ向けて救助に行く場面は悲劇的である。

○今夏、五隊・二十数人もの日本人がアイガーにむらがり寄ったことは、日本の心ある登山家たちの中で強い批判を受けていた。この一編の意図が「登山界への警告として」というからに

は、その実情を享し、悲劇を契機に、自分をも含めて強い反省を描いたら、いい作品になったろう。登らなかった自分の隊は自己規制の勝利であり、遭難隊はおのれ心との格闘に敗れた、というのだけではない。

◆国際環境生◆

理学会報告

国際環境生理学会が、9月12日〜17日、京都の国際ホテルで開催された。この学会は主として環境と生物の關係についての問題をとりあつかうので比較的広範にわたる領域を持っている。

異常環境という点で高所もふくまれるので登山関係の人々も各国より集まり、次の様な演題で発表があった。
S. Lahiri : (Dept. of physiology, Presidency College, Calcutta, INDIA)
Some aspects of muscular exercise in Himalayan altitude residents.

W. Wehrli : (High Altitude Research Station Jungfraujoch)
Influence of age, physical activity, and ambient temperature on the acclimatization of rats to high altitude.
J. Rivolier (Service Medico-Physiologique Expéditions Polaires)
Psychosomatic Problems and Psychological adaptation to Polar Wintings.

其の他英国、エベレスト登攀で知られる Dr. Pugh、及び南米の高所研究所の研究者等数多くの登山関係者が参集した。

本会でも、これ等の人達との集会をもって話し合うつもりであったが、運悪く台風のため東京に集まる時間がまちまちとなり実施出来なかったことは残念であった。(辰沼広吉)



会務報告

海外連絡委員会報告

▽日時 九月二十四日(金) 六時半
▽場所 本会ルーム
▽出席者 三田、吉沢、近藤、芳野、松田、倉知

議事

(1) 六十周年記念祝賀パーティーに招待する外国山岳会、在日外国人登山家リスト検討。
(2) 印パ紛争に伴うヒマラヤ・カラコラム情勢について
(3) アラスカ事情
(4) その他

常務理事会

▽日時 九月二十七日(月) 六時半
▽場所 本会ルーム
▽出席者 加藤、大塚、松田、川崎
▽議事

六十周年記念事業実行委員会に引続き次の事項を検討した。

(1) 東九州支部設立の件、…大分支部長より大分支部に宮崎県在住の会員を加えて東九州支部に致したいの承認されたとの連絡があったが、本件は役員総会の承認事項と考えられるので、次回役員総会にかけることとした。

(2) インド・エベレスト隊員招待の件、過日帰国したインド大使館武官メタ氏より、インド・エベレスト隊員二名を東京に招いて懇談の機会を作ったか、との申出があったが、

「何分、エベレスト登山許可の見通しがたない現在のところ、その時機がくる迄延期したい。その時に必要ならば更めて本会よりお願いする」との返事を出すことにする。

(3) 「山岳」広告の件

責任者を川崎理事とすることに決める。

(4) 会報ファイルの件

折井評議員に見積を依頼したところ、見本が届いたので、検討した。

(5) 外国登山雑誌注文の件

一九六六年一月号より、Alpinismus, Bergsteiger の二誌を購読することにす。

(6) 装備処分の件

大塚理事より本会で所持している装備品処分の方法について提案があったが、各支部の意向も聞いて慎重に行うことにする。

(7) 国体委員総会報告その他 (以上)

十月理事・評議員会 (七日・ルーム)

▽出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事 加藤、松田、飯野、大塚、川崎、竹田、宮下、田村、評議員 日高、村井、神谷、藤井、津田、吉沢、支部長 牧野、石原、三井、沼倉、支部委員 (以下委任)、田辺、住吉、村木各理事、藤島、今西(錦)、折井、望月、各評議員、荒巻支部長、高山支部長、藤木顧問。

▽議事

(1) 六十周年記念行事の件、行事計画は案内状の通りとする。これに要する予算は五九〇千円で、現在四八〇千円は見通しがついている。残りの一一〇千円についても日高氏のお骨折りで目下募金中なので目標達成は可能である。

尚記念品の頒価は八〇〇円に決定。招待者のリストに物故名誉会員夫人、物故元会長夫人を加えることを決める。

(2) 名誉会員推薦の件 名誉会員推薦等に関する内規案を検討し、一部内容を修正し、次の様に決定した。

第一条 定款第六条第四項に基き、推薦基準等につき次のように定める。

第二条 名誉会員の推薦は、評議員会の推薦によって会長これを行ない、原則として年次晩餐会の席上において発表するものとする。

第三条 名誉会員は左の各項のいずれかに該当する者の中から推薦するものとする。

一、登山界に顕著な功績ありと認められるもの。

二、会長の前歴あること。

三、四十年以上の会員歴を有すること。

第四条 名誉会員は原則として本会の役員または評議員の選挙対象から除外されるものとする。

第五条 本規定の改廃は、評議員会に於てこれを行うものとする。

(附則) 本規定は、昭和四十年十月七日より施行する。

これに基き、今年度推薦される候補者については会長が評議員の意見をまとめ決めることにし、十月十四日の記念祝賀パーティーの席上発表することとする。

(3) 功労者、永年会員表彰の件

永年会員は五十年在籍の二十七名とし、祝賀パーティーの席上、特別につくられたバッヂを贈呈する。功労者以上名誉会員、歴代正副会長、十五年以上支部長として尽力された会員とし、当日記念品を贈呈することとする。

(4) 国体委員総会報告 (加藤)

岐阜国体の閉会式の前後平湯小学校で開催された国体委員総会には本会より協会に代って加藤専務理事、辰沼、大塚、松田各常務理事が出席。山岳協会の新組織について説明を行い、各県代表者の意見を聴取した。その結果、協会新規約の主旨については了承されたが、分担金の額については、多くの意見がだされて修正の必要があると認められた。このため、山岳協会では新規約を一部変更するための臨時役員総会を十月二十二日に開催の予定である。尚本会としても、組織上種々と問題を残しているため、早急に資料をつくり各支部に連絡をとることに致したい。

(5) 大分支部名称変更の件

大分支部長より申請のあった大分支部に、宮崎県在住の会員を加えて東九州支部に名称を変更する件については、変更する理由が若干不明の点もあり、又山岳協会の新方針に副って努力中の本会にとって、誤解を招くおそれもあると考えられるのでこの旨松方会長の私信を以て、連絡することとし、改定同支部の実状を聴取した上審議することにする。

(6) 年次晩餐会開催の件

今年度は六十周年の記念祝賀パーティーもあるので中止する案もあったが、会員各位より強い要望があるので、例年通り十二月上旬に行うことを決定。

(7) 各担当理事業務報告の件

① 装備 九月二十三日に在庫装備の棚卸をし、

② 展示用品 (竹田・大塚)

(a) 使用不能の品 に分類した。

(b) 使用中の品 中の使用不能の品につき処分方法を如何にすべきかの提案あり、種々と討議したが結論はでず、次回迄に装備担当理事で案を練ることとした。

③ 学生部 (竹田)

九月下旬 ABCD ブロックに分れて、夏山報告会を開催した。尚十月二十七日に九段会館で講演と映画会を開催。十一月中旬に年報を刊行の予定である。

③ 海外登山 (大塚)

(a) 昭和四十一年度の海外登山審議会を十月十八日に開催の予定である。

(b) 台湾への登山の件

今年度は年末に四隊が台湾へかける。本年度は本会の推薦は先着順に行ったが、次年度からは検討の余地がある。本件については、六十周年記念パーティーに來日する台湾山岳協会の意見も聞いて案をつくることにする。

④ 海外連絡 (松田)

九月二十四日に海外連絡委員会を開催した。

⑤ 集会 (川崎)

九月二十九日に、武藤、平山氏を招いて「南極の山」と題して小集会を開催した。十月の小集会は六十周年の行事と重なるので中止する。

⑥ 山岳 (松田)

一部原稿が遅れたため六十周年記念パーティーには間に合わなかった。年内には刊行致したい。

⑦ 会報 (宮下、松田)

二四四号は十日過ぎに発行の予定。順調である。

⑧ 山日記 (渡辺)

一九六六年版の編集は順調にすすんでいるので十一月中旬には発行できる予定である。

山日記は一九六三年版をピークに発行はダウンしている。(二五〇〇部位。各位の御協力をお願いしたい。内容は本年版迄は集団登山を対象にしていたが、今回は、二・三名の人数のパーティーにも向く様に配慮した。利用者層を高校生、大学の下級生と考えて編集しているので学生部でも P R して戴きたい。

⑨ 会員名簿

十月十日には印刷完了の予定である。

んなことである。会報で予定を発表すると(毎月十山行位実施されている)どの山行にも三十名以上が参加しており、盛会であるが、数日間を要して山脈をつれて行く玉山や雪山、中央山脈への登山の数は少ない。そしてこれらの山行は日本の登山隊と合同で行なわれていることが多い。

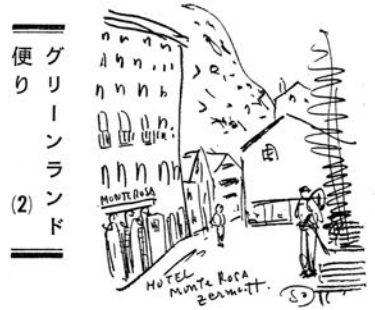
会員の状況は会費の納入状況からみて団体会員一〇、賛助会員二〇〇名、常会会員八〇〇名、賛助会員二〇〇名でJAC会員の約半数の数を占められる。会の収支をみると会費以外に、林務局等から多額の補助をうけていることがわかる。

第十四巻第四期の内容をみると六月一日より実施の入山管制放憲(会報二四〇号一頁参照)徳島城東高校山岳部OB会と合同の玉山重踏記、桃山・大霸尖山・雪山縦走記が主要記事で、日本からはこの他に千葉大学薬学部のはな山岳会、亜細亜大学山岳部が本年三月訪れていることがわかる。

尚本年二月大垣山岳協会(隊長樋谷祐七氏)の玉山登山に同行し、帰途落石事故により重傷を負った山岳(高地ポーター)史進君はその後五ヶ月を経ても経過はすぐれず、未だ入院中の由、これに対し蔡礼樂、林文安、余初雄氏等七氏が発起人となって史進君の医療費用募集を行っていた記事がてい。寄付者芳名録をみると日本人は亜細亜大学山岳部、神戸大山岳部北健一氏の名前しかみられない。日本からこの数年來、数多くの登山隊が台湾を訪れている。そして何れの隊も山岳には大変世話になっている筈である。会員各位の中でこの募金運動に御賛同の方は、本会海外連絡委員会御担当折井、又は事務局松田迄御一報載けましたら幸いである。(松田)

蔵書の交換について

会報二四〇号で会の蔵書で二部以上あるものと、欠号のものを交換方お願いしました所、早速会員馬場勝嘉氏から交換の希望があり、AJ No. 302, 303とAJ 287, AAJ 21との交換を致しました。紙上を借りて御報告を御礼申し上げます。他のものについても御協力の程お願い申し上げます。(倉知)



グリーンランド (2)

宮原 巍

御蔭様で私たちが無事に帰ることができました。本当にいろいろと御世話になりました。それにいろいろと御世話にできずに申し訳ありません。

登山はフォールレックの東および南側から二度試みました。最初のルートは水河があまりに急で、全く手が出ませんでした。南側は登頂可能かと思われたのですが、計画の立て方の拙さで行きつことができませんでした。ちょうど八ツ峰と北尾根を合わせたような所で、それほど困難ではなかったのですが、一つキャンプ不足でした。もう一度やりなおす日数の余裕もあったのですが、帰りがギリギリにおいこまれたことなどから、登頂を断念しました。いまから考えますと以後の天気もよく、その余裕は最後まで残ったので残念でなりません。ともかく全体に私たちの計画は一月遅かったようです。結局は山岳地帯の横断ということだけで私には一杯だったようです。この間もほとんど登攀の一部のようなものでした。帰りましたら詳しく御報告申し上げます。

コバンハーゲンには九月二十一日に帰りました。旅行その他は何のトラブルもなく、また皆も黙って一所懸命よくやってくれました。

コバンハーゲンでその山岳会長に会い、またグリーンランド探検の書物のある古本屋を教えてもらい、昔の種々のレポートを見ましたが、たくさんの人達によって書かれているのに驚きました。安いのを数冊買いましたが、集めようと思つた方がないと思うほどです。地図も多少買いました。詳しい地図はほんの一部分しか完成されておりません。

日本には予定通り十月十二日横浜港に着きます。(松門山岳会グリーンランド登山隊長、十月四日パリにて金坂宛)

二つの思い出

中 司 文 夫

欢呼の聲で送られて高知歩兵第四十四聯隊に召集を受けたのが、丁度二十八年十月九日(昭和十八年十月九日)であつた。敗戦の日で、私生活にも、亦山岳会の仕事にも、いやと云う程戦争の渦の中にたゝもみれた。

この年の六月下旬、ウエストン師のレリーフ建設を求めて、植さん、黒田孝雄君、レリーフ製作者佐藤久ちゃんといと四人、上高地へ行った。平和なところを持って、梅雨にぬれてその候補地を探して歩いた。六百に及ぶ雲ののんびりな谷間に流れていた。その足もとを清冽な善六沢が洗ひながら梓川に注いでいた。現在の場所五千尺で常盤が住んでいたあたり、水車がしづかに廻っている後の岩壁その他二ヶ所を予定地として、写真やパタービーを撮って来たのをも見て貰い理事会で現在地点に立てられることに決つたのであるが、その時、帝国ホテルの四で四人写真撮った。これが黒田孝雄君と一緒に撮った思い出の写真となつて終つた。戦争は満洲で彼の命を奪つて終つた。彼が召集されるまで殆ど毎晩虎の門で一所に指導を受けつゝ、会の仕事をした。いゝ先輩を失つて残念である。ともかく上高地から東京に帰って見ると。なんとなく世間がさわがしい。T君兄弟は海外出張するが、その中に日本の運命の日七月八日ややつて来た。私はウエストン師レリーフ除幕の日十月十四日を目前にして召集されて終つた。戦争末期のこのレリーフが地元青年団から、ウエストン師は敵性人物だ金属回収にしろとの声が大々となり、いゝ実行される危険が迫つて来たので、これが取はずし持ち帰る交渉の任に、建設のときに植さんのお伴で行つた関係で故茨木先生、交野君等と共にものに当り、ともかく長野県庁へ回収品が積まれていく長野の街を通過し、心中不安の思いに重く、取はずし持帰りの諒解を得るため交渉に赴いた。あちこち部局を廻らされた後ようやく諒解を得ることになりつて松本に我々は向い一先ず途中交野君の苦勞をされ無事交野君の背に毛布にくるまって虎の門に取戻して来られた故茨木先生と交野君との功績はまことに大きい。それが又空襲に会い、熱のためにくねくねになつて終つた。これを又佐藤久ちゃんが修繕し戦後昭和二十年春六月であつたが、上高地に再び元のところへ戻ることになった。私はまたも病気で参列することが出来なかつた。私は場所を探すとおき供したり、取りはずしの交渉にも当り参列する機会には恵まれなかつたが、念である。しかし昨年までは年に三、四回上高地を訪れ必らずレリーフの前立って来るのが楽しいうらわしとなつていたが、今では昔のようにならなかつた。昨日大久保にある都の衛生試験所に

用があつて行つた。行つてみたら、敗戦前陸軍技術研究所のあったところである。山岳会に岩登り技術についての照会があり、西堀君と私達が招かれたことを思い出した。それは日本軍がウラジオストック辺りであつたのかの上陸作戦のための岩登りであつたように記憶している。その辺の海岸がずっと切り立った岩壁であるのだらうであつた。又それから陸軍省から山岳会に朝鮮(今は北朝鮮)の蔚山(岩壁指導に会員を派遣して貰いたいとの申し出があつたが、難れも行くことを好まず事実上断つて終つた。まだその頃は軍の圧力が強くなつて来なかつたときであつたが、情報部井上氏が動き出されるようになってからの山岳会は如何にしてわが山岳会の伝統をくずさず如何にわが山岳会がつかれずにこの難關を切りぬけてゆくかに冠さん、西堀さん、加藤誠平さん等と共に、日夜苦勞を重ね、わが目的をつらぬくために、現在の全岳連の元祖である全国の山の会を統合する企てをしたもの。しかし、この会も行軍登山をするようになつて来たので、意見が合はず。西堀君と私等は、日本山岳会に立てこもり、虚々実々西堀君等々と終戦まで戦いつつた。一度その頃のことを西堀君等と思ひ出話でもしたいものと思つてゐる。こんなことを昨日陸軍技術研究所の跡を通過して想ひ出した。

それにしても終戦後胸を思い又胃をも思いともに手術をするに及んで、永いことお山には登げれなくなつた。云うことは、なんと云うみじめなことだろう、と自分は思つてゐる。今も登りたい思ひ一杯である。けれど世の中は思うようにならぬもの、今では遠くからでも山をながめて楽しんでゐるような次第である。

今日は久々に雪の富士を見ることとが出来た。本当にうれしかった。(昭、四〇、一〇、九夜)



◆ お詫び ◆
編集の手違いで、九月度の新入会員、住所変更が、次号掲載の止むを得ないことになりました。深くお詫びします。

◆ 故増田繁雄氏のこと ◆

故増田繁雄氏（会員番号三四八二番一九四九年四月大会）は、戦後本会に多数の和書を御寄贈下さった方ですが昭和三年三月二八日逝去されました。享年六二才。

今まで会報にも山岳にもこのことが出ていませんでしたが、今度前編集長古沢肇氏のお骨折りでその経歴その他がわかりましたので、ここに紹介するとともに故増田氏の御冥福を改めて祈るものであります。

明治三十五年一月一七日生

世田谷区成城町一五九
古沢氏よりの問合せに対し長女の方より左記のようなご返事が来しました。
出身地・京都市八瀬、出身校・名古屋高校、職業・三〇数年、千代田火災に勤務、停年後、佐藤塗装店。

学生時代から登山をはじめ、日本アルプスは二回、昭和一五年まで大阪にいたので、三ッ嶺など殆んど山の廻った様子。蔵書を山岳会に寄贈したのは、自分が年をとって登山することもなくなったのを機会に、若い人達に読んで頂いたら、というのが動機。
趣味・写真、最後は名所旧蹟、仏像美術館歩き。

◆ 私は長女でございますが、父は田舎育ちで、背は高い方ではなく、まるで山男のような身体をしておりました。私が小学校の頃は父はまだ若く、正月はきまづ一日から山へ出かけるのが習慣でした。大阪時代、会社の登山部に入っていて、若い人達を連れ、京都の愛宕山へ行き、道に迷ってその夜帰宅しないことがありました。
マナスの頃、横さん大乗業行しておりました、シエルバでよいからついて行きたいと洩らしておりました。
(六月五日) 以上

会報二四四号訂正

一頁三段、最後の行、一、〇〇〇円を八〇〇円に、二頁三段三行尾久島を屋久島に。七頁五段三行、カンボチエ峰をカンパチン峰に。同三二行 Kan-shooche を Kangshchen に。九頁五段 40 行 London を London に。同 45 行 Mountain を Mountain に。十頁三段 30 行 Journals を Journals に。十一頁四段 41 行 四〇を四一に。十三頁二段 41 行八〇〇を八〇〇円に。十五頁四段 退会会員の氏名、松岡忠太郎を松岡忠太郎に。同最終行、福田康雄を福田庸雄に。九頁一段、図書紹介、最初の Japan を Japan に訂正。

編集後記

本会の創立六十周年の行事も、記念山行の一部や来年の展示会を残し、盛大に終わりました。まずは目出たし、裏方のご苦労にも深く感謝したいと思います。

本号は止むを得ず二十頁となりましたが、編集の都合上、次号に掲載させて頂くおまな玉稿は次の通りであります。失礼の段お許し下さい。

・南極越冬再開に際して（武藤 晃）
・ドンジュク峰初登攀とアラスカの山（芳野赴夫）
・フランス山岳界の近況の後半（近藤 等）

・ロスコ山群（上智大学）、六十周年三首（広瀬 誠）

◆ お願い ◆

近頃原稿を書いて下さる方が多くなりましたが、家庭の都合で頁数を無暗と増やす訳にも参りません。そこをお願いなんです、当分の間、「北の山・南の山」の原稿は四〇〇字詰二枚以内ということにしたいと思ひます。御協力下さい。

◆ 駄句二つ ◆

・割付けを終えし途端に又残る不満のありて眼は閉じぬ
・刷り上りを誰よりも待つ編者にして、持てば再び読む気力なし
依って件の如し、という訳です。
(吉沢一郎)

昭和四十年十一月十日発行

東京都渋谷区神宮前
三ノ三 外苑コーポ内
発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎
電話(総機)六五〇一七五
直通(総機)七六五七
振替口座東京四八二九番

領価五十円

東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りました!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は

日本団体生命

新宿支社（専門取扱営業所）
東京都新宿区角管1の844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

登山における 人体工学追求の 勝利!!

画期的な新製品

シャモニー
キシリング
株式会社 サクライ
TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8

